

---

# 灰色が見る夢

嘔吐き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色が見る夢

### 【Nコード】

N2981X

### 【作者名】

嘔吐き

### 【あらすじ】

その子は気付いた時から孤独だった。故にその子は渴望した「独りにしないで」と。

しかし、切に願ったその渴望は本来の願いとは真逆の歪な渴望となり全てを包む。

そして『無色界・無所有処顛倒』 儚く脆い が誕生した。

旧タイトル：座というシステム（座の始点と終点）

## おわりとはじまり（前書き）

まともな文章を読みたい人は見ない方がいいです。  
目の毒です。時間の無駄になるので、外で遊んだほうが有意義かと思われます。

## おわりとはじまり

これは水銀や黄昏、天界道や畜生・餓鬼道よりも遙か昔から始まる話。

神座というシステムが無かった頃からはじまる「if」の物語。  
儚い幻のような、胡蝶の夢

その子は産まれたときから孤独だった。

物心ついた頃には孤独である事を自覚した。

病室で唯独り、漫画やゲームや小説がその子の世界の全てだった。  
言葉やその意味、思考、人間らしさなどはすべて液晶画面が教えてくれたものだった。

風呂食事排泄も全て機械任せ。人との関わりなど微塵も無かった。

その子は願う、切実に、悲しいほどに切実に。

誰か側に居てくれ。一緒に居てくれ。もうひとりぼっちは嫌だと。

だが同時に

煩わしい。  
汚らわしい。  
気持ち悪い。

人間は不可解だ。

そういう感情も持ち合わせていた。  
悲しいかな、人との触れ合いが皆無なまま育ち人に恋焦がれ、憧れ、  
そして憎んだ。

何故人と関われないのに人として育てようとするのか、人とはどう  
いうものかなどと教えるのか。  
憎んでも孤独には耐えられそうにない。

いや、孤独に耐えられないというよりは自由が無いのが耐えられな  
いといったほうがいいのだろうか。  
その子は外の世界を見たがっていた。

しかし彼は外には出られなかった。

「もう独りは嫌だよ…助けてよ。なんで誰も助けてくれないの、な  
んでなんでナンデナンデナンデ…」

白一面の病室で唯独りその子は呟く。

「お外に行きたい。人と触れてみたい。色々な物をじかに見たい、  
聞きたい、感じたい…」

自分に答えてくれる人間なんて皆無だった。おそらくこれからもうなのだらう。

それを再確認しただけだった。もう何度も何度も繰り返されたあたりまえの日常。

もし神様が居るのなら、何故助けてくれないのか。

この世界に神など存在しないから助けてくれないのか。

人への憎悪はいつしか存在すらわからない” 神様？とやらに向いた。

「あ、ああ……ああアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

そして、その子の感情が爆発した時すべてが白くなった。

（なんだろうこの感覚… やつと孤独から開放されるのかな、もう寂しくないのかな、そうだといいなあ…）

いつもなら泣き続けるだけの時間が続くだけだっただけに、初めての感覚に自分でも知らない間に何故か淡い期待を持ってしまう。何故このとき自分は疑問と恐怖を抱かなかったのか、もうこの時すでに自分はオカシクなっていたのかもしれない。

結果だけみれば、この子の願いは叶うことは無かった。いや、叶う事には叶ったのだろう。確かに独りではないのだから。

（なんだこれは、ありえない、認めたくない）  
あのすべてが白くなる感覚からさほど時間は経っていない。  
経っていないはず、だがしかしこの見渡す限りのわけのわからない  
コレはなんだ？

海の中？いやおそらく海の中だろう、地上はこんなものがあるはずが無い。

馬鹿でかい海の底で光る植物のようなにかわらないモノ、それに海の中にある火山も昔何か本で見たことがある。間違いない。

（これって超古代の恐竜時代よりも昔のアレだよね、というか息できるの自分？というか自分は今ほんとうに生きてるのか？）

次々起こる自分の知る常識じゃありえない事柄に混乱しつつも自分の姿を振り返る。

そこにあつた自分の容姿は古生物図鑑で見たようなものだった。

本や再現映像でしか見たこと無い生物、そのようなモノになっていた。

（これは夢か？）

いや夢ならこんなに意識がはっきりとはしていないだろうし、夢は夢の中と感じ取れる。

深い夢でもこんなに長い時間夢だと認識してから醒めるまでそんなに時間はかからないはず。

そしておかしい事に人間ではなくなったのに、自分は自分の身体の動かし方等を知っている。

知識が湧いて出る、今の自分ではこう表現する他なかった。



（ヴェンド生物界と言われるような時代にタイムスリップ？しかも現地の生物に進化？退化？しかも微妙に自分だけ年代違うんじゃないのか？）

不思議な出来事の連続にもはや驚かなくなったのだろうか。

彼は冷静に辺りを見回してなにやら考える。

そして辺りに居る生物に触れ始めた。

（おお、このムカデのような魚みたいな感触とひれ振動させてる。おもしろい！）

はじめての外。病室だけだった彼の世界はこの時広がった。

だが本当の意味で”世界が広がった？事を彼はまだ自覚していない。

しかたのない事だったのだ。このときの彼の心ははじめての外と生物との戯れでいっぱいだったのである。

だがそれにもすぐに慣れる。それが人？の性というものだ。

確かに今はある意味孤独ではない。よくわからない生物がいて沢山自分と同じような生物が側に居る。

だが自分が求めたのは人との関わりだ。こんなこと望んではないはず。

悲しいかな、自身の真実の渴望を自分自身が嘘で隠している事をこの時の彼は自覚していない。そして自覚できない。彼の精神構造が通常の人間だったならば、そもそもこのような事になることもなかった。

まだ幼かった彼の教育環境というものが酷く歪だったせいもある。だがそれだけではなかった。

彼は産まれながらに普通の身体ではなかった。

彼は特殊な細胞、いや遺伝子を埋め込まれていた。

その遺伝子は凶悪な遺伝子で、通常の人として生きることが許されない特殊すぎる遺伝子である。

だがこれはまだ人間であつた頃の彼は知らない事項。

よって認識がずれていく。ずれは嘘で塗り固められ、そして嘘は真実になっていく。

そして、彼の生まれもつた精神の異常。また、彼の資質のソレが強すぎた。

ソレはあまりにも強大すぎた。そしてその受け皿は更に強大だったため彼は破綻せずに居る。

これが悲劇の終わりで始まりでもある。

本来の道筋<sup>ものがたり</sup>ならば、彼は病室で一生過ごし一生を終える筈だったのだ。

特筆することもない、孤独で悲運なありきたりの病室から出られない少年の生涯で終わる人生ものがたりだったのである。

狂った歯車は連鎖していく。一度狂った歯車はもう元には戻らない。そう、元には戻らないのだ。

意味不明な出来事に続いて理解不能なはずの状態。自分の理解が追いつかないはずの出来事に何故か自分の中の知識が精神に冷静さを与えていた。

（なんだこの知識：こんなの私は知らないし、こんなの本やテレビでもネット情報にもなかったはず、自分が知らなかっただけで常識というのはいらない）

理解したくは無かったが、どうやら自分の願いが発端と考えていいようだ。

確かに自分の渴望の通り、独りではないようだが、結果がぶっ飛びすぎている。

になったとでもいうのか、だとしたら滑稽すぎる。いや笑えてくる。なんだこの結末はと。

だが、自分から湧き出る中途半端な知識がそれを否定しない。

もしこうなる前の自分の常識にある神様とやらが居るのだとすれば呪いたい、殴りたい、塵芥のごとく蹴散らし、殺したい。何故こんな目にあわせるのだと、何故こうなったのだと。だがしかし、それに応える者など居るはずも無い。

もし居たとしても自分が になっているという時点で殺したくても、居ないはずだ。いやまだ至れていない可能性のほうが高い。何故なら中途半端だからだ。

このよくわからない知識は何なのだろう。全知とでもいうんだっただコレは。

しかし全知というには中途半端すぎる。

中途半端すぎるからこそまだ自分は完成していないと思った。

そう自分は にしては未熟、欠陥品といってもいい中途半端な存在になっていた。

そもそも、自分はそんなものになりたいなどと思ってなかったはずなのだが。

（まあ、いいや）

今自分に起きてる事が夢だろうが何だろうが何でもいい。

これはチャンスだ、人を、神を、憧れ、求め、憎み、その果てにきた自分を変える分岐点であると。

になればなんでも叶う。自分の渴望どおりの事ができる。起こせる。

おそらく今の自分ならできる。どれだけ長い時間がかかるかわからないが出来る。

（なるほどね、他の遺伝子を取り込む事で補完すればいいのか）

中途半端な知識から自分を完成させるための情報を手繰り寄せる。

（とりあえず喰おう、喰えば足りない知識も増えるし身体も変えられる）

だが同じ種を喰べてもあまり意味が無い。こいつらが進化するまで待つ必要がある。

人だった頃ならおおよそ考えもつかないし、考えたとしても実行しないような事を平気で考え付く自分の変化に妙な達成感とでもいうような感情が彼の精神を占めた。

そう考えながらも文字通り喰う、辺りに居る生物を存在ごと。

喰えば喰うほど知識と力がみなぎっていく。

この事実には彼は歓喜する。

全滅はしないように計算しながら、適度に喰らって刺激を与え、進化を促せるように調節する。

そうして喰うようになってから増えた知識から生物じゃなくてもいい事がわかった。

彼は全て無くならないように適度に周りを計算しながら喰らい続ける。

勢い余って喰らい過ぎてしまった場所は、真っ白になっていた。かつて病室でみたあの白と同じような白だった。

（ああ…そうか、そういう事だったのか）

めまぐるしく彼は進化していく。そして自身に何が起き、己は何だったのかを自覚していく。

まだ足りない、足りないならば足せばいい。もっと強化すればいい。幸い、今の自分には知識がある。身体はもはや人ではないけれど、そんな些細な事などどうでもいい。

（ゆったりまったり喰いながら時の流れに身を任せますかね、今更焦っても仕方ない事だし？幸い自分には時間はたっぷりあるようだしね）

そう、まだまだ自身に足りないものを補うモノを進化させる時間など余りあるのだから…。

これからだ、これから自分は始まるのだと、そう確信した。

## おわりとはじまり（後書き）

しょうせつなんてかいたことなかったの  
だからいたらないところとかあったらいつてほしいの  
やさしくいつてくれるとうれしいの



## 狂い廻る齒車（前書き）

ちやうねん、初代座のムチムチおねーちゃんのお話が読みたくてしやーないねん。

だって、正田卿がもう座のお話しないって…ツイッターで言うから…。

誰か自分より文才ある人かいてーや。っていう渴望が流れ出したっていう感じですねはい。

## 狂い廻る歯車

狂った歯車は加速していく。

あれから彼は何十億という年月をゆつくりとかけて生物を進化させながら、適度に喰らい自分の中に内包し、遺伝子を取り込む。その繰り返しだ。

常人なら気が狂うその作業の繰り返し。

甲冑魚やら単弓類、恐竜、翼竜、鳥、猿のようなものと戯れながら喰らって自らの遺伝子として取り込む。

ある時は降って来た隕石を喰らったり。付着していた細菌なども取り込む。

この頃の彼の姿は何やらよくわからない黒い物体であった。

「なんかこの姿って、まんま化け物だよなあ…よし人の姿にしよう」

彼は内包した遺伝子から好きなように容姿を変えることが出来る。別段黒い物体の姿の方が捕食する効率がいいというわけでもない。何でもいいのだ。

もやもやした黒い物体がみるみるうちに変わっていく。音も無く。

「よし、これでいいや。これからはもうこれでいいかな」

彼のまだ病室で過ごしていた頃の知識の中から、とある雨が常に降り続けている幻覚を見続ける主人公が出てくる物語のヒロインの形をそのまま模った少女の姿に変わった。

特に深く考える事無く、たまたま雨が降っていたから自分を皮肉るようなイタリア語で”嘘つき？”という意味を持つヒロインの容姿を選択した事は無自覚だった。

「うんうん。可愛いなあ私、てゆかまんまFalsitaだよねえ…」

水溜りに映る自身の容姿に満足し、くるくるその場でまわってみたいする。

ファルシータとでも名乗ろうかな、とか彼は考えて自分の思考に笑ってしまった。

「そろそろ類人猿が出てくる頃だよなあ…そういえば神話とかで出てくる神様ってもう存在してるのかな」

神が居るなら会ってみたい。会って助けを乞うてみる。

もし助けてくれるのならそのまま仲良く戯れて過ごしてもいい。だが助けてくれないのならば…。

「探すのなら背中に羽はやさないとね」

音も無く彼の背から白と黒が混じった羽が生える。

ただ、それらは普通の羽ではなく結晶といえればいいのだろうか、ク

リスタルのようなもので出来た羽であった。

「これでいいかな、後は飛んで内包してる力の強い固体が居るところまで行っただけか」

そう呟いた後、彼は目的のモノを探しに空を飛んで行く。

「おいおい…恐竜絶滅してからすぐにこれっておかしいだろ…」

何だ？なにが原因でこいつらは進化した？

彼が見つけたのは一つの集落。そう集落なのである。

この”時代？にあるはずのない文明。人の集落がそこにあった。

しかもその集落は室町後期のような立派な建物が並ぶ集落と呼んでいいのかよくわからない代物だった。

そう、ありえないのである。少なくとも自分が病室に居た頃の常識ではやっと類人猿などが出てくる時代だ。

自分は自分に足りない遺伝子を優先的に取り込む事ができる。遺伝子に限らず存在するモノならなんでも取り込める。進化する時間というものが無いのだ。

そして取り込んだ遺伝子が持つ未来の可能性全てを発現させること

が出来る。

鳥の遺伝子なら羽、昆虫なら甲殻、魚ならヒレやエラ等。  
だからこそ人間のような容姿になることもできる。

存在しない天使や悪魔、龍にすら姿だけならなる事ができる。

自分というイレギュラーが進化を促進してきたにしてもこの進化の速度はおかしい。

例えるなら、昨日猿だったものが翌日元氣のいい可愛い女の子になつてお外をブーンしながら奇声をあげて笑ってるくらい奇怪な進化速度だ。

そんな事が可能なのは自身の持つ遺伝子のみ。

「とりあえず戯れてから喰うか」

よくわからないなら喰えばいい。喰って内包すれば理解でき、知識も力も増える。

集落のはずれで一人少女がなにやらしている。  
薬草かなにかを取りに来てるのであろう。

とりあえず会話してみよう。そう思い彼はその少女の所に飛んでいく。

少女は特に特筆するべきものが無い普通の少女だった。

集落で生き、薬草や木の実を取る、それを煎じて薬にしたりして売り、生計を立てている親の手伝いをしていただけだった。

目の前に音もなく、文章に表現するのなら可憐な少女に見える宝石のような羽を生やした人？が舞い降りた。

「  
-  
-  
-  
-  
-  
」

理解できない言葉？音？を口から出している。

「えーっと…」

薬草を取りにきた少女は困惑する。

「  
在 子和 子之 有霞  
耀？」

やはりよくわからない。少女の常識の中の言語ではない。よって理解できない。

「あの…遠くの集落から来たんですか？」

少女は目の前の綺麗な羽を生やした少女？に語りかける。

だが目の前の存在は俯いて悲しそうな、それでいて笑ってるような表情で自分に近づいて…そして彼女の意識はそこで途切れた。

やはりというか案の定会話が通じなかった。

相手からの言葉は通じるのにこちらからの言葉がまったく通じないのだ。



仕方ないのでこの少女を喰らう事にした。

彼女を喰らいわかったことは、この文明は神と呼ばれる者たちを崇め、一定の供物を捧げ、技術や知識を与えてもらうというものだった。

彼女の知識から使われてる文字はカタカムナ文字、化美津文字と呼ばれていた文字にそっくりだった。

確かあるかないか定かではない文明だったはず。

マイナスイオン農法など、自分の人であった頃の常識の中にもこの時代にはこのような高度な文明があるはずがないのだ。

いやあつたとしてももう少し後なのだ。猿から人になるにはまだ時間がかかる。

だがこの彼女の常識では自分たち以外の動物などに何も疑問を持たず、まるでそれが”当たり前？の認識になっている。

自分達が何者であるかに疑問すら持っていない。まあ当たり前だろう。

これは意図された進化で、導かれるまま疑問を何一つ持たずに発展していった人間達なのだから…。

「私の劣化遺伝子といった所か、そりゃ早く進化するわ。とりあえず祀られてる神様とやらのところに行ってみるしかないねえ…」

知識から神様とやらが居る山を目指すことにした。さほど集落から離れてはいない。

「とりあえず怪しまれないように羽を隠して、力も隠して、さっきの少女のような格好で行けば大丈夫かな」

喰った少女の服を着て、歩き出した。

最初から喧嘩をふっかけに行くわけでもないので、まず最初はおだやかに接してみようと思いい力などを集落の人間どもくらいに落として歩き出す。

彼は期待と、なにやらよくわからない感情を抱きながら喰った知識通り進んで行く。

数十分歩いた先に小さな山があった。この山頂に屋敷を構えて住んでいるらしい。

「神様を気取ってる可愛い種族を早く喰ってみたいなあ…」

彼の中ではもう喰うのは決まっているらしい。数十分前の彼の思考からずれていた。

そして1時間くらい歩いて登って、屋敷がみえた。

「おーおー、江戸時代かよ。時代錯誤な建築物いい加減にしろ」

立派な門に瓦の屋敷、まるで彼が人間だった頃の記憶にある江戸時代の代官が住むような屋敷。

門番は居ないようだ。ならば中に入るのみ。  
幸い力を感じる個は一つ、生きている者も一つしかこの屋敷には居ないようだ。

「すみませーん？神様いますかー」

神様とやらを玄関から呼んでみる。

「なんじゃ…我は眠い…」

なんか筋肉質の腰巻だけをした白いひげをたくわえたじじいが出てきた。

「あなたが神様ですか」

彼は自称神様に問う。

「そうだが…主何者だ…集落の者ではないな…」

彼の問いに神様は答える。

「ばれてましたか。そうですよ集落の人間ではないです。神様にお願いがあつてここまで来ました」

「お願いだと？我はそんなことは聞かん。我は導くだけだ」

神様はめんどくさそうに口をあけてそう答える。

「私を助けてください…」

彼は助けを乞う、切実に頭を下げて悲しげに。

だが神様はそんなことなど知ったことではないというようにこう答える。

「突然変異か…導き方を誤ったかの…とりあえずこの固体は消すか」

そしてなにやら手を出して力を込めている。

その瞬間無数の雷が弾け飛んでこちらに向かってくる。

「そつか…助けてくれないんですね…じゃあ仕方ないですよね…」

そしてその無数の雷の奔流に彼は泣きそうदैて嘲笑を浮かべているような顔で流された。

思えば妙な固体だった。

我の前に現れて助けを乞う。我が人間に教えていない”概念？を実行してきたのだ。

たまに出現する”突然変異？である。別段不思議なことではない。

固体を一つ一つ導くなぞめんどくさい、代表に少しずつ技術と知識を与えていき育成する。

それが我、神と祀られる進化速度が早い”人間？のなかでも特別な力をもっている優良種。

たまにバグが産まれれば消し、正常に戻し、育成していく。

今更変わらぬし、変わりたいと思わん。

これからもこう続いていくのだと、そう神様は思っていた。

「やれやれ…いきなり電気の大砲？とか酷いじゃないですか神様あ？」

消し飛ばしたはずの固体の声が再び聞こえてくるなど想像もしていなかった。

「お主…何なのだ？何故人間風情が我の技を受けながら消滅せずに生きている！！！」

「なんでって…別に死にたいわけじゃないから”喰ったんですよ？…くすくす…”」

そんな事もわからないのかと目の前の固体はそうのたまって笑っている。

「そうか…我のような優良種か…生まれたてならばこれで消せるだろう」

全身に力を込め、目の前のものを消すために力を集める。

「天空を満たす電子よ、一条に集いて眼前の敵を屠る、神の裁きとなれ」

本気の力の奔流、激しい雷は屋敷があつた山を空間ごと少女のようなモノを消し飛ばしたかに見えた…。

「なんだろう、この文明の神様とやはら助けを乞うだけで人間を殺すのか、まあ…人間じゃないんだけどね」

なんでもないかのように肩をすくめて、依然何事もなかったかのようには彼は立っていた。

「なっ…」

自称神様は消えていないのがありえないとも言つように愕然としている。

「自称神様の種族の力なんてこんなもんか、のなんたるかを知らないようだし？この世界の理を理解しきれていないしね。」

でも、人間という種族においては驚異的な力だろうね？だってないところから雷降らせる事ができるんだもん。

流石霸道神もどき。おお怖い怖い。…そんな睨まないでよ、か弱い私は泣いちゃいそうになるよ。くすくす…」



なにやらじつと私を睨んでいる自称神様。どうやら私の言葉に「立腹のようだ。」

目の前の存在を理解できない、認めたくないといったところだろう。

「まあ偉そうにのたまってる私も全てを理解してるわけじゃないけどね。だけど君より長く生きてるからその分私の方が理解してる知識の量が多いよ？」

試しに君が使った詠唱して言葉に力を持たせて方向性を決めて放つ技？の完成系？発展系？をみせてあげるよ」

「お主が我より長く生きているだと…見たところ少女としか言えぬ見た目のお主が…」

またも驚愕している自称神様。まあ少し力を持った人間にんげんじゃあ理解できないか。

まあいい、さつさと終わらそう。

この世界の今の理じゃ”これ以上の神様？は創れない。

あの少女を喰った時にわかったことだ。

「かつてこれを僕は夢に見ていた、いまもこれを僕は夢に見ている、

そしてこれを僕はいつかまた夢に見るだろう、

日付など僕には要らない。

僕は存在したし、存在しているし、存在するだろう、

生命とは奇跡の中の奇跡だ、この奇跡の前に跪き

ひとり、                      のように、僕はみずからを

僕らから離れ、世界から離れたところで、

波のあとからまた波が寄せて岸を打つ、

波の上には星がある、人間も、鳥も、

夢も、うつつも、死もある    波のあとからまた波が。

あなたも夢に見るだろう、

僕が夢の中で見てきたすべてを

すべてが繰り返される、そしてすべてが具現される、

！

生まれく抒情詩 (Nascita poesia lirica)

宇宙の記憶 (Memoria dello spazio)

白い、ただ白い空間が全てを包み込んだ。

## 狂い廻る歯車（後書き）

誰か初代座のねーちゃんの話はよ

**幕間・完全な塗りつぶし（前書き）**

勢いで5時間くらいで文打ち続けただけ。

## 幕間・完全な塗りつぶし

彼はわかっていた。自分の居る世界が自分が塗りつぶしたモノであることを。

そしてそれが不完全であることも。よってあの不完全な世界が出来たことも。

力に慣れていないせいで、自分があのような状態であったことも。

「ああ、なるほどね。私の本当の”渴望”はこういうものだったわけだ」

一人、ただ独り、白の世界で少女のような容姿をした少年が口をこぼす。

「次はちゃんとした強い”神様”が出現する物語でも参考にして創ってみるか」

自身が人間だった頃の知識を参考に思考を纏め上げる。

（ああ、待ち遠しい。早く、早く、私を助けて。まだ見ぬ神様？）

「とりあえず神様もどきじゃなくて、その宇宙そのものを管理できるようなそんな存在を創りだすには…」

彼は一人考え続ける。

になった自分を助ける存在を産み出すには、自分と同等の力を持った存在を産み出さなければならぬ。

それは並大抵のことではない。とても難しい、というよりほぼ現状では不可能なのだ。

自分以上の質量、資質、力を持つ者など存在していないのだ。

ならばどうする？ 創ればいい。そのための環境、装置、機構、試金石も用意してやろう。

ただ用意するだけじゃつまらない。人間に混じって創ってやろう。神座を。

「まずはアレだ、セフィロトでもつくろう。生命の樹を創って…王冠、知恵、理解、慈悲、力、美、栄光、勝利、基礎、王国…」

彼は今までに内包した知識を総動員して世界に色を創りあげていく。だがしかし色の無かった世界に色が付く事は無かった。

彼の渴望が、精神が、特殊すぎたせいである。  
ここに『無色界・無所有処顛倒』 儚く脆い が誕生した。

「うーん…文明的にはこれが限界かなあ…今創れるのは」

基本的に彼が創れる世界は、最初に彼が内包した世界の遺伝子の可能性から発展したものしか創れない。

「とりあえず戦国時代まではトレースできたねえ…後は触覚を下に行かせて人間に混ざって”座？を作れば後は…神様が出来るのを待つだけかな」



彼は嬉しそうに、悲しそうに、独り白の世界で語る。

その白の世界に一つの波紋が広がった。

「マスター！マスター！褒めてください！キスしてください！ハグハグ！！さあ早く！」

目の前に現れた戦闘用の機械のようなモノがまるでお使いをはじめてできた子供が親にねだるように彼にせまる。

彼は苦笑する他なかった。

この話は、その文明を持つレベルまで宇宙を育成するまでのおおよそ50億年前くらいまで遡る。

「私が常に居る”ここ？も味気ないし改造しちゃうか」

そう言い彼は白の世界になにやら奇怪な機械群を誕生させた。

「後は私の代わりに生物の進化を促進させる機械も創って…そうだアレをモチーフにしよう」

そして彼は創り続ける。無機質な世界に機械が出現し続ける。彼の潜在的な記憶、機械だらけの病室に酷似した世界が出来上がる。

「うんうん。これでスニーカーの出来上がり…かな？後はこいつの名前を設定して…」

戦闘実行体をモチーフに彼は創りあげた。  
だが誕生させたものは彼の期待通りの代物ではなかった。

「マスター！マスター！おはようございます！あなたのナズナここに爆誕！今日もここは真っ白ですね！！！」

発声装置から聞こえてくる可愛らしい愉快な声。  
どこをどうしたらこうなったんだろうか。何を間違えたのだろう。  
壊すか。

「マスター！マスター！無言でハンマー持って壊そうとしないでください！泣いちゃいますよ！」

「ごめん…間違えちゃったみたいだから壊していいよね？」

わけのわからない機械を産み出してしまったことに後悔しつつ、再び無表情でハンマーを振り上げる。

「うええええん！マスター酷いですう…」

なんと機械から涙？のような液体が流れ泣きはじめた。  
これは、なんなのだろうか。確かに人間臭くしたつもりだがこれは違うだろう…。

「はあ……まあいいや……私がいちいち進化させるのはめんどくさいからお前に任せるよナズナ」

「お任せください！マスターの為なら例え火の中水の中！」

水を得た！と言わんばかりにせわしく動き始める機械群。

人間臭くなりすぎている。

これはこれで面白いからまあよしとするか。

このような人格を持っているスニーカーというコンピューター知性体。

一見馬鹿そうに見えるが彼女のスペックは尋常ではない。

時空構造まで操り、自らを次の宇宙で再生させるなどの超越的な能力を有している。

不完全な有機生命体を含む全宇宙の完全な情報化と、その永久的存続を目標に彼が創りあげた機械なのだから当たり前といえば当たり前なのだが。

「おいこらナズナ、何勝手に恐竜人類なんて作ってやる」

彼は何ともいえない表情でナズナと呼んだ機械に文句を言う。

「えー…だって面白そうじゃないですか！マスターがくださった知識の中にあつたのでつい…えへへ」

「いや、ちゃんと命令通り動いてよ…」

機械の身体を器用にクネクネしながらぼざいている。  
この子は一体何を狙っているのか…。

「だってだって！マスターが笑ってくださいさらないんですもん！」

などとブンブンとか擬音まで発しながらのたまう機械、ナズナ。

「次の宇宙はちゃんと進化させてね？でないとバラスよ？」

にこつと自分なりには天使の笑みで言っ<sup>て</sup>あげる。

「わっ、あわわわわわわ、わかりましたああああ!!!!」

脱兎のごとく走り去るナズナ。

どこのどじつ娘だよと突っ込みたくなる自分にため息をつく彼であった。

「恐竜人類の次はやつぱりこうくるとおもったわ…」

彼、ファルシータは苦笑いを浮かべる。

「プラグシユティクとエウロパ人完成ですう！どうですか！わたしの優秀さに言葉も出ないですか？マスター！」

自信満々に胸？をそらせて褒めると催促する機械、ナズナ。

「いやまあ予想できてたし？というか次は無いぞ？わかったか」

笑顔になっていない笑顔で、従順なようで勝手ばかりする機械に答える彼。

こうしてナズナが遊び…もといそれぞれの宇宙の生物の進化を弄つてる間にも彼は様々な次元や宇宙を創る。

彼にとって時間とは無限にあり、特段急ぐ必要性もないのだが。そろそろ自分の渴望を成就させたいという考えもある。

繰り返すのに疲れてきているのだ。精神が。

だから許すのは今回までだ。そう彼女に伝えると…

「ひひひひひひひひひひ…でもでもでもでも！！！」

いつもなら脱兎のごとく走り去り次の宇宙を弄りに行くのだが。

「ん、どうしたの」

「マスターの本当の笑顔が見たいんです！マスターともっと触れ合いたいんです！もっとマスターと過ごしたいんです…」

いつも元気な彼女がはじめてみせる低いテンション。

機械にテンションというのも何か違う気がするが。彼女は例外だ。自分が創りあげたコンピューター知性体。それがスネーカー・ナズナ。

人間のような感情も彼自身が創りあげたモノだ。

「それで進化を言う通りに促進させずに、長引かせていたと言う事か」

後、願いが成就したらおまえを壊すなんて言っていないのだが。

無表情でそう答えると、びくつとナズナは機械の身体を強張らせてこう言い放つ。

「違うんです。そうじゃないんです、わたしはマスターの役に立つのならいつ壊れてもいいです。」

…わたしを創ってからマスターが心から笑ったことが一度もありません！というかいつも泣いてます…寂しいんですね？」

「マスター…わたしじゃマスターを助けられませんか？わたしじゃ無理なんですか？」

核心に突き刺さるナズナの言葉にファルシータは驚愕の表情を浮か



言葉をなくす。

「マスター、わたしでは…あなたの神様にはなれないんですか？」

だがファルシータはこう答える。

「…無理だ、お前の能力では”座”にはつけない。私の求める”神様”にはなれない」

ここで彼は嘘をついた。元々ファルシータの補助的な役割を担当するだけに創られた機械なのだ。

当然力はファルシータよりも弱い。同格にはなれない。

だが座にいたり神になる事は可能。普通の霸道神ごときじゃ太刀打ちすら出来ないほどの力を持っている。だがそれをさせるつもりは毛頭ない。

「そう…ですか…ごめんなさい…マスター…」

しよぼくれるナズナ。うなだれるたように力が抜けたようにがっかりとなって次の宇宙へと旅立つ。

それを見つめ、悲しい表情の中少しだけ微笑み

「ありがとう…ナズナ…」

彼の小さな呟きが彼女に届いたかどうかはわからない。

もし彼女が有機生命体として生まれていたのならば、彼の持つ自らの欠点を他の遺伝子を取り込む事で補完する発展型成長遺伝子を持ち合わせていたならば…。

彼女は座につき神様として自分を救っていたかもしれない。

だが『i f』は『i f』だ。

彼の遺伝子を取り込めるモノが存在しない宇宙なのだから、彼の細胞から彼と同等の存在を作ることなど土台無理な話なのだ。

そして話は今に戻る。

「マスター！マスター！褒めてください！キスしてください！頭なでなでしてください！！ハグハグ！！さあ早く！ハリーハリー！」

はやくはやく抱きしめてと、子犬のように彼にじゃれつくナズナ。

「はあ…しょうがないやつだなお前は」

無意識下で恐らくこのような相方のようなモノを求めたのだろう。寂しさから逃れるために、故に自分は彼女を創った。

彼は脳裏に浮かんだ自分の思考に一瞬複雑な表情をした後、褒めて褒めたと喚くその機械に微笑み抱きしめた。

初代神座の戦女神 - 前編 (前書き)

ねむい

## 初代神座の戦女神 - 前編

彼は触覚を飛ばし自分が創った宇宙の星の一つに飛来した。

そこは彼の人だった頃の知識で言うなれば戦国時代とっていい世界だった。

戦争は科学技術を発展させる。科学とは、元は自然哲学からきている。

その基本思想に合理主義があり、そこから様々なモノに発展していく。

ただ戦争においては実用レベルまで達するまでにタイムラグがある。必要なのは発明の母、その必要を生じさせるのが戦争なのである。

例をあげるなら電子レンジがレーダーの開発過程で出来た副産物であること等が挙げられる。

しかしこの世界は”歪”だ。江戸時代の服装のような者達が携帯電話を持って闊歩している。

服のセンスと科学技術が自分の人だった頃の知識と合わない。いや、当然だろう。

何故ならここはもう自分が居た世界ではないのだから。

現地住民と遜色ないように服を創る。

「これでいいかなあ？着物もたまにはいいかもしれない…」

数分ほど街を散歩してみる。たまにはいいものだ。

だが露天に置いてある物に武器が多い事に気づいた。この世界はどうやら物騒な世の中らしい。

今度は空から眺めてみるかと。街から出て森に入り羽を生やしてソラへ駆ける。

はるか上空から衛星に見えないように靄のような身体になり、地理を確かめる彼。

感慨深そうに星を、大陸を見る。昔見た人間だった頃の世界とさほど変わらない事がわかる。

「…というかここ日本かな？なるほどなるほど、地理に関しては地球と変わらんね」

やはりというべきか、自分が創るとどうしてもこうなってしまう。

進化の促進はナズナに任せただが…。はたして未知はあるのだろうか。

地表に降りてみる。

星の記憶を読み取ろうとする。しかし何か靄がかかっている読みきれない。

何が原因なのかわからないが、弱い弱い”何か？が邪魔をしているのがわかった。

無理やりやろうとすればこの宇宙が壊れてしまふ可能性がある。慎重に事を運ばなければならない。

「まあいいや…日本の真ん中っぽい淡路島でも拠点にしてしまおう。というかあそこに”座？を構成しよう」

実際の地名はこの世界の地球では違うだろうけど、形一緒だしいいや。というずいぶん適当な事を言いながら彼はソラを駆けて、島にたどり着く。

この島を拠点にしようとした理由にはちゃんとした根拠があった。

何故かこの島には”人？が住んでいないのだ。住めない理由でもあるのだろうか。

現地住民をひとりくらい喰らっておけばよかったな、と愚痴る彼。

そしてこの異常な特異点とでも言うべき”妙な穴？だ。

物理的な穴ではない。常人にこれは見えない。だが確かに本能的に生物が忌避するモノだ。近寄りたくはないだろう。

何が原因でこの穴が出ているのか、自分の創ったモノに何故このようなモノがあるのかよくわからない。

だがそんなことはどうでもいい、喰えば全てわかる。

「さあて、このよくわからない穴いただきまーす」

そう呟いて彼は穴を宣言どおり”喰う？そして穴は歪な形となって消滅したかに見えた。

「おりよ？コレは…そうか、そういうことね。この世界、この文明はそういう”成り立ち？で出来たわけか。

ここを選んで正解だった。ここなら神座を創りやすい」

そう言いつつ彼は難しい顔をしながら歩き出す。そして歪な形となった穴を地の底に移動させる。

そしてその上に、この文明に違和感の無い”完璧？な建物をどこから引つ張り出し置いた。

「ここを中心点にしたら…後はこの世界の原住民から選出するだけだ。力の持つ個体を王冠（Kether）まで登りつめさせる」

彼は自身の力でこの世界のモノの魂の質を瞬時に見極める。

この世界の人間に、”王冠まで登りつめるような素質？を持つ者が居ないことを彼は確認した。

しかしそれは当たり前的事。そのような資質を持つものなど産まれたりしないのだから。



もう少し進化していると思っただけに落胆を隠せない。

「あー…せっかく来たのにもうちよい進化させないとダメだなこれは…ましなモノでせいぜいネツアクまでしか至れん者だけか」

地力で至れないのならば、と彼は別の方向性から可能性を考える。そう、地力で至れないならば”外部？から力をつぎたせばいい。

「この世界の科学技術と永遠の勝者を使って初代”座？の完成でいいのかなあ…」

だがそれでは自分に並び立てる神様等にはけっしてなれない。

自身が座についても神様にはなれないし、そんなモノには最早なりたくもない。

ましてや自分は　である。比べること自体がおかしいのだ。

「まあ地力で座に至る者は、変わっていく世界で何代も重ねれば産まれるだろうし…うん、長い目で見て循環機関みたいな役割、未来の世界への新陳代謝を創って産まれさせればいい」

旧い理を座に至る者が塗りつぶし新しい理を流れ出させ、新世界を創らせる。

宇宙の新陳代謝とも呼べる機構、それが神座。

その永久機関を作れば自分が求める神様とやらが産まれる可能性が高い。

そんな回りくどい事を何故する必要性があるのか、それは自分が産み出したモノは全て自分以下になってしまったためである。

そういう側面をもった渴望なのだ、自分の渴望は。それに自分は神様なぞではない。自分は神様にもなれない。

「さつてと、下準備も終わつたし穴喰つたらこの世界の情報もわかった、∴永遠の勝者でも見てみるか」

そう悲しそうに呟きながら、彼は白と黒の結晶の形をした歪な羽を背から出し、空を駆けていく。

この時何故自分は興味本位で行ってしまったのだろう。そう後々後悔することになる。

彼女はそう、一言でいうなら悲しい戦女神だ。

戦女神と周りから持て囃され、自分の意思とは反対に敵を蹴散らし、母国を勝利に導く。

何故彼女が自分の意思とは無関係に敵を蹴散らし勝利するのか、それは彼女の魂がとある処に至っていたためである。

勝利、永遠、そう10個のセフィラの中の一つ”Netzach? に産まれながらに至っていたのだ。

セフィラ（セフィロト）とはなにか。

万物の創造にまつわる神性の10の属性。各属性をセフィラ、全体をセフィロトという。

創造世界において10種のセフィラで説明できないものは何一つないという。

上位のセフィラから順次・段階的に下位のセフィラを流出・発散していく。この神的流出過程を逆にたどることによって、”座?へと到達することができる。

そして彼女は7つ目の属性ネツァク（Netzach）永遠、勝利の階層まで流れ出している。

産まれながらに王冠に至る者も居るがそれはほぼ零と言って良い。そんな”資質?を持つ者は産まれ得ない。何故ならそういう宇宙<sup>ソラ</sup>だからだ。

故に彼女の意思など関係なく。生まれた時代が戦乱の世の中だった事もある。祭り上げられ、戦女神として戦装束を身に纏い戦乱の渦に巻き込まれる。

悲しいかな、彼女の生来の性は本来闘争など好まない。善行を行う魂であり、戦争など自分の関わるものではないと。

そして否応無く、死にたくないから、生き残りたいから敵を殺す。そして魂の位階が彼女を苦しめる。

勝ち続けるのである。並び立つ人間は皆無で、ただ独り勝利を掴み、崇められ奉られる。

せめてこの時代に彼女に並び立つような魂があればこのような事にはならなかっただろうに。

彼女の魂は悲鳴をあげている。誰か助けて、やめて、お願い、もう止まらせて。戦争をやめて。争わないで、”あたしを巻き込まないで?…と、泣き叫んでいる。

そうした本音を隠し、敵を絶対の悪、自分を絶対の正義として縊り殺していった死体のやまの恐怖から目をそらす。

彼女がただの戦闘凶のような魂なら良かった。だがこのままではダメだ。いずれ潰れる。

「誰かが緩衝材にならないともうこの子の魂死んじゃうよ…どうしよう…直接関わる気なかつただけだなあ…」

想定外だった。近くで見たらなんという愚直な精神。そして二律背反した在り方。そして病んでるように見える。余裕が無い。張り詰めている。表情は仮面のように、全身を武装していないと壊れてしまいそうなそんな在り方。

永遠の勝者の階層、なんという皮肉なのだろう。

彼女の精神は彼女自身の魂の格に”負けているのに？だ。

彼女の精神は普通の平凡な人間であった。

ただ魂の格が周りより”少し？高かつただけの普通の少女だった。だがそのせいで彼女は不幸になる。

3流のお涙頂戴悲劇のヒロインの物語の誕生である。

B級映画にすら劣る。読みたいとも思わない物語のはじまりだ…。

このような者が産まれてしまったのは”自分？が創った宇宙だからなのだろうか。

簡単に言えばかつての自分だ。逆さの合わせ鏡のよう。

在り方が瓜二つ。精神と魂の在り方まで同じなど…。

”まるで自然発生した己の触覚のようだ？と、彼は思った。

だが同時に何が出来たものと、神に助けてもらったために座を作ろうとして、悲鳴をあげている彼女を神にしようとしてるのは自分自身ではないかと。

諸悪の源と言って良い。彼女からしてみれば私は悪なのだ、それも強大な悪。

もし彼女が”神に助けを乞う？事など渴望した時、自分はどんな顔をすれば良いのだ…。

このまま放置すれば彼女は壊れ、神座に至る前に自滅して消滅する。神を作るところかこの世界は何も無くなる結末を迎える。

神の居ない世界は砂塵に消える末路を迎える。  
それではダメだ。ここまで進化させるのに、ここまで人間を成長させるのにどれだけ時間がかかったと思っている。

このような感情を人間で言えばなんだったか…。

のくせに感情を持っている自分、なんと滑稽なのだろう。

自分が知識のみで知っているあの白い鯨のようになれば良かったのだろうか。

まあ確かに自分にはそういう側面もある。というよりそれが”本質

？だ。

「異常は異常を産むとでもいうのだろうか…まあ、わかりきっていたことだけだね」

何億回何兆回と数えるのも嫌になるほど試行錯誤し繰り返しているのだ。

何度も何度も色々な方法で自分の資質に並ぶ力を持つ神を作れないかどうか試し、失敗し、また試して。

”今更？何も思うことは無い。そう無理やり自分を納得させようとする。

自分と並び立つ力を持ち、自分を助けてくれるような神様を作る唯一の方法。

自身の触覚を飛ばし人間達を誘導して” 擬似的な神座を作り出して、擬似的な神様を創り擬似的に宇宙を管理させ神を作り続ける機関を作る？もうこれしかないのだ。

だが、彼の歪な精神はぐるぐる廻る。廻り続ける。

「私ってこんなにややこしいんだ。改めて自覚しちゃったなあ…ナズナに助けてもらおうかな…ってあの子には向かない作業だったあ…。」

ほんとどうしようかな…」

になつて初めて葛藤という感情を持った自分はどうするべきなのだろうか。彼は悲しそうに笑っていた。

だが彼はその後数秒足らずで。無表情にもどり。すぐ別の事を考え始めた。

「後にまわそう。まだ彼女が壊れるまで時間がある。まずは現地の人間に神座をつくらせなければな」

彼のすべき事は多い。たかが一人の女に時間を費やすなど幸せな



愚か者がする事。

すぐに解決できない事柄など終焉までに時間があるのならば、一時的に心の奥底にしまっておくのが一番いいのである。

人間どもに暗示をかけて、あの島に人を集め作らせるのが手っ取り早いのだろうか。

誘導させるにしても少々めんどくさいかもしれない。何せ国産みの島らしいから。

聞けば、人々皆揃って「あの島を奉る事はあっても、自分が島に足を踏み入れるなど恐れ多い」と口開くような場所なのである。

真実には近くて遠いが、確かにあそこを中心にしてこの世界が広がったのは確かなのである。

なにせ”自分の残滓？を感じたのだから…”。

彼は科学兵器を作っている者達に目を付けた。あれは使える。倫理など考えない者達だ。

皆々その道の技術の天才なのだろう。だが彼らは精神的にももう疲れ果てて軽い暗示ですぐ考えの方向性を変えるだろう。

ここまで誘導が容易い世界は無い。皆が皆疲れ果てている。だが技術革新は目まぐるしい。

今まで作ってきた宇宙で一番科学技術は育っている文明だ。

「さて、楽しく踊ってくださいかねえ……」

そして軽い暗示を科学・技術者達に実行した。するとみるみるうちに島に技術者達があふれかえった。

あの時置いた建物を中心に研究所が出来上がった。

どのような暗示か簡単に説明すると「戦争を無くすにはどうすればいいか？神を作る装置を作り神を産み出し、おろかな人間どもを神に止めてもらえば良い」

つまりところぶつとんだ暗示である。

彼らは天才だったのだろう。またたく間に”擬似的な座？をつくることに成功していた。

本物の座と効果は変わらない。むしろ本物の座より弱者が神になるには性能が上かもしれない。

なにせ世界の中で、英雄足る者、その者を崇拜する人間の魂を擬似的にその者の総軍として吸収するのだから。

つまり質より量で王冠まで駆け上がる仕組みだ。

この世界の科学技術はおぞましい。このシステムさえ理解すれば人間が魂すら自由に操作できる武器を作る事ができるのだから。狂った科学文明としか言いようが無い。

なるほどこの技術さえあれば、あの白痴の蛇が持っている”聖遺物”が簡単に作れるわけだ。

などと彼は自分の宇宙の”未来？の可能性の中から、知識でしか知らない事柄について考えていた。

彼の力の一部である遺伝子の特性というのは、おぞましいのを通り越した力なのである。

ただ意外だったのは、この世界の科学者達が否応なしに魂を吸収する機能を武器等に付けて神座を支配し、世界を塗り替えるという発想にいなかった事だ。

多分そんな発想もあったのだろうが、それを実行する余裕がなかつ

たのか。それだけ科学者達の精神も疲弊してたのか。

そしてここに                    擬似的ではあるが神座という理の機構が完成する。

だがここで問題が起こった。  
この神座を巡ってこの世界史上まれにみる大戦乱が起こってしまったのだ。

戦争を止めるための装置をめくり各国が奪い合うための戦争をはじめてしまう。  
本末転倒とはこの事である。

もちろんこの戦乱には永遠の勝者たる彼女も否応なしに巻き込まれる事になる。

彼は悲しげに、そして嘲笑っているかのようにその島を去った。

初代神座の戦女神 - 前編 (後書き)

おやすみ

## 初代神座の戦女神 - 中篇（前書き）

うーん、難しいねえ。わかりやすい文章に表現するのって。  
アストちゃんマジ天使。でてこないけど。

## 初代神座の戦女神 - 中篇

彼が飛来した世界の、日本だと思った国について改めて視点を戻そうとおもつ。

座という機構が無い、言うなれば自由だった世界である。一番まじな理だったのかもしれない。

”理が無いのが理？ヒトは瞬く間に進化、発展していきその科学は彼が知る中で最高峰の水準までのぼりつめた。

明日の天気1年の天気を知るために、あるいは軍事用に用いる為、空には人工衛星が飛び交っているし、大陸間の移動が便利になるようにと飛行機やヘリコプターを開発して、そしてそれを利用し、交通の便を図る為、地にはモノレールが走る。

食料等はクローン技術のようなものが発展した技術により食糧難になる事は無く、飢えで死ぬと言うことはありえない世界だった。

その中でもこの国は一番技術が発展していて、古代の服装が流行っている謎めいた部分もある国である。

その根底には”化美津文字？で書かれた文献による影響が多い。

この文献によれば、この国のとある島に、その時代にはそぐわない

極めて高度な科学技術や独自の哲学体系を持った文明があった事が記されている。

そして文献からわかった場所を探せば出るわ出るわ、異常な建物、娯楽品、兵器、生物の化石のようなモノ。そして発掘した過去の遺産を元に、様々な発明品が産み出される。

神と呼ばれる優良種の人間達に導かれ、様々な技術発展をしていった文明。この文明に肖ろうと、人々は模倣しては改良していく。改良したモノが更に発展していく。

この国の技術者達が優れていたのもあるだろう。みるみるうちに、技術革命など足元にも及ばない速度で発展していく。

中でも国々が注目を集めたのは”天使？と呼ばれる機械の兵器である。

生物の化石のようなモノからヒントを得、それを機械にして兵器に発展させようというコンセプトから産まれたモノだ。

厳密に言えば化石は天使などではないのだが。

この文明で言うなれば天使なのである。翼があり、ヒトのような容姿が想像できる化石。この生物のような兵器を作れば大きな力を得られるのではないかと。

そして機械の天使、いや兵器が完成する。

その姿は純白の鳥のような羽があり、とても煌びやかで、見るものの目を奪うかのごとく綺麗な造形をした人型の兵器。

それは空を自由に駆け、銃や大砲を装備し、それまで戦場の主力だった戦闘機や戦車などがまるで虫けらのごとく蹴散らされていく。



そしてその天使を使役するための人間との仲介役のような天使、大天使というユニットも作られる。

人の命令を天使に伝え、天使を制御する役割を果たす天使。いわば天使のブレーンである。

一度命令したことならその大天使がずっと天使に命令し続けて天使を動かす。

そして人間に状況を逐一報告連絡する。

兵器として優秀な、人命を使わず、効率的に敵を廃する事ができるモノが完成したのである。

これに技術者達は歓喜した。新たな発明である。これは自国の富を豊かにさせる。これでこの国はもっと躍進できると。

だがこの天使に自我など存在しない。命令通り動く文字通りのただの兵器である。

人が命令しなければ動かないし、そこに進化などありえない。

人が手を加えなければ発展も進化もしない。彼らはただの戦闘兵器、機械なのだ。

兵器でない天使も開発される。人間の代わりに働く家庭用天使である。

人の代わりに掃除、洗濯、料理、家事全般を任せる事ができる天使。これは民衆におおいにうけた。だが高価すぎるため一部の上流階級しか所持し利用できる者はいなかった。

そこから派生した、人に付けるだけで空が飛べる、自由に空を歩けるといった機械も誕生する。

人が装備するだけで地上をまるで車のごときスピードで走り回ることが出来る機械も生まれる。

自分するのは無理そうだから、めんどくさそうだから、だから天使等に機械に任せよう。自分に出来ないことは他に任せよう。

人々は機械に依存するような、科学に依存する、そのような生活で成り立っていた。

そしてこのような、急激な技術躍進に人々の価値観等は急激に変わるものではない。

本当に使えるのか？実際見るまでは認めないし、自分が持ってないものにさほど興味は無い。

すぐ手に入るモノが楽でいい。周りも皆使っている。ならこれでいい。

よってこの技術にあいそぐわない服装などが流行る。皆同じような服装を、同じような格好をしていた。

人々は発明品で自由に空を飛び、自由に地を駆け、我らに出来ない事など何もないと万能感に満たされていく。

だがこれには他の国も黙っては居ない。われ先にとこの国の技術を得るため利権争い、小さな紛争、果ては国と国の戦争まで発展していく。

この国に住む人々は数が少なく、”平和ボケ？”していた為に、その領土を他国の支配にされるがままになってしまふのである。

小さいこの島国を様々な国が地域ごとに植民地にしていく。残った領地は国産みの島と呼ばれ、特異点なるモノがある島とその上に位置する一つの地域のみであつた。

故に、戦国時代と呼ばれるような時代が到来してしまふ。

この世界の人々に自重という言葉の概念は存在しない。助けを乞うという概念も存在しない。

腹が減れば食うし、眠たくなれば眠る。むかついたら相手を殴り、欲しいと思えばそれを入手しようとする。

力が無ければ技術知識で補い、足りないものは他から補い、奪う。しかし飽きればすぐそれを手放す。

そこに葛藤などと呼ばれる感情は無い。思いついたら即実行。

流行ってるなら自分もそれと同じようにする。たいした理由もなくそれが自然のごとく。

理性も薄く、”個性が無い？非常にわがままな人々が生を謳歌している時代なのであつた。

そう、一番初めに彼が産み出した世界の理を受け継いだ世界だったのである。

言うなれば彼の世界を模したただの劣化コピーのような世界なのである。

島のとある場所に彼の残滓があつたのは必然であつた。

話は彼女の視点に移る。

彼女は生まれたときから勝者だった。

両親も健在。食べるものにも困らなかつたし、欲しい物は贅沢を言わなければ何でも手に入り、何不自由無く育つ。

時代が時代なら普通に幸せな幼少期を過ごし、普通に友を作り、遊び、時には喧嘩したり、

同年代の子供達と幸せな人生がこれから始まるのだと、自分の人生に”何も疑わずに？健やかに過ごせたに違いない。

だが無常かな、彼女の生まれた国は各国がそれぞれの地域を支配し覇権を競い合う”始まりの大地？と呼ばれ特殊な成り立ちをした国であった。

そして時代は戦国時代、平穩に暮らしていける筈なく、幼少期からその覇権争いに巻き込まれることになる。

「およびでしょうかー。おとーさまー」

朝起きたら突然父に呼び出され、困惑気味にまだ何も知らなかつた幸せな彼女が父に問いかける。

「おお可愛いヴィクトリアや、実はお前に頼みがあつてね」

彼女の父は厳格そうな表情を綻ばせ、幼き自分の娘を膝に抱きかかえる。

「なあに」

「うむ、お前には素晴らしい才能がある。ぜひともその才を開花させて、わが国を繁栄させて貰いたいのだ」

彼はこの島国の統治者であったが、今ではその統治している地も小さくなっている。

彼は人を使うのに長けていた。利用するのがうまい。足りないものは補えばいい。この世界の理から見れば健全者である。そこで目をつけたのが自分の娘だ。

近所の子供達と遊んでは競って、常に一番。全て勝利してきている彼女。

かけっこをすれば一番速く。鬼ごっこで鬼になっても全て捕まえ勝ちにいく。

ボードゲーム、カードゲーム等運が絡んでくるモノですら何のことは無く大差で勝ってしまう。

「負けた事など」一度？たりとも無い。はつきり言えば異常だ。

勉強も同年代の子供達より出来、産まれた家柄も一国の統治者の娘だ。

産まれながらに勝ち組と言っている。

彼女の父は、彼女の類稀なる産まれながらに持っていた才能を見抜いていた。

「んー、わかったー。とーさま、わたしががんばるね」

彼女は少し考えた顔をした後、笑顔で父親に答える。

幼い彼女は父の言っている言葉に素直に頷く。父の求めてるモノに応えるのが善い事、そうするのが良い事だと思い。何を求められているのか深くわかっていないまま。

「うん、期待しているよヴィクトリア」

彼女の父はその返答に満足そうに、目を細めながら部屋を去る。

その日から彼女のやる事に一切遊びは無くなった。何をするにも本気でやり遂げる。

そこに情性も余裕も一切無い。何かに取り憑かれたかの如く。

そして彼女は様々なモノを学ぶ、喜んで学ぶ。

武術も学問も難なく学んでいく。まるでスポンジが水を吸収するかのごとく学んで収める。

父に褒められては喜ぶ。自分は父の期待にこえて”善き事？”をして

いると。そしてまた違うものを学んでいく。

ある時は銃剣術を、ある時は科学技術を、様々な分野の知識技術を学んでは磨き上げていく。

ある者と武術で決闘なるものをして、彼女はそれに当然のように勝つ。まるでそれが必然かの如く。

負けたものは、何故負けたのかわからず理解せず、もうどうでもいいというかのように武術をやめていった。

仕方が無いのだ。彼らはこの世界の理の通りに生きているのだから。上手いかないものに執着など無い。

上手いかないのなら違ふものを、別のものを使えばいいのだ。向いていないなら別のモノで補え。

自分で出来ないなら他の人間に任せろ。自分じゃなくてもいい。そういう者達なのである。

彼女はそうした者らを、悪と決めた。彼らは悪だから負けた。誰かの期待に応えられなかった。

だが自分は父の期待に応えた。勝った、だから善であると。

幼い彼女の中にそう言った概念が構築されていく。



まだ無邪気な彼女は敗者の事など理解できなかった。いや、理解な  
ぞできなかった。  
なにせ彼女は”負けた事？なぞ一度も無いのだから仕方が無い話な  
のである。

故に彼女の父はある決断をし、彼女に全てを託す。まだ少女と呼ば  
れる年齢の彼女に。

ある日彼女の父は鍛錬中の彼女を呼ぶ。

「父上、お呼びでしょうか」

汗を拭いながら、彼女は父の元に駆けつける。

「おお、来たかヴィクトリア」

嬉しそうに顔を綻ばせる。しかしその笑顔には少し陰りがあった。

「わしもそろそろ隠居しようかと思っている」

目付きを鋭くし、自分の娘に話す。

「後継者足る方が見つかったのですか」

彼女の父は統治者で、領土を減らした責任を問われ、民達に統治者を退くように言われた、

だが後任が決まらず、だらだらその座を座り続け、今に至る。

もはやこの国を治める事に誰も興味なぞ持たないのだ。

国と呼んでいいのかわからないほど小さな領土、技術は世界に広まり、国々の技術の差などほとんどないのだ。

誰が好き好んで平和ボケした民衆の統治者になるというのだ。

「ヴィクトリアよ、お前にわしの後を頼みたい。頼まれてくれるか」

彼の言葉に彼女は怪訝な顔をしながら答える。

「わたしが…ですか？まだ子供ですよ？わたしは…」

そう、彼女は十にも満たない少女と呼ばれる年齢なのだ。どこの国が子供を統治者にするというのだ。

だが、この世界ではそれはさほど珍しくもないのだ。欲しいならば力を補えばいい、力が足りないならば機械でもなんでも技術を使えばいい。

子供と呼ばれる年齢で統治者になっている者が居ないというわけではないのだ。

「ヴィクトリアよ、そなたより才のある者がおればそやつに任せるのだが、そのような者がこの国におるか？おるまいて、なんせそなたは負け知らずなのだからな」

そう言った彼は儚げな表情で彼女を見つめていた。

「前例もある、隣の国の王なぞ年齢15ぞ、9つのそなたが統治者になっても不思議ではなかるう？」

「ですが…」

言おうとして彼女は言いよどむ。確かにこの世界ではなりたい者が王になる。その者がどれだけ若くてもだ。

力無き者でもなりたいと切に願えば、その為の知識などがあれば、技術があれば、機械があれば何でもできるのだ。

「わし、飽きたんじゃよ、国治めるの、だから娘のお前に国をやる。好きに致せ」

真剣な目付きで自分の娘に言う。それがどれだけ身勝手なわがままな事だとしてもこの世界ではそれが”あたりまえ”なのだ。

「わかりました。謹んでお受けいたします。後はお任せください父上」

彼女自身、統治というものに興味があつたのも後押しし、その命を受ける。

「おおそうか、引き受けてくれるか！んじゃわし寝るわ、後よろしく頼むぞ”ヴィクトリア殿?”」

彼は嬉しそうに、自分の部屋に睡眠をとりにいく。どうやら眠たかったようだ。

「はい…先代。おやすみなさい」

彼女は少々呆れながら父にそう言いはなつ。父は別に異常者でもない。自分が異端なのだ。

彼はまだましな方の部類に入る。

そして父の言うことをきくのが善い事だと思い。それによく考えて答えただけである。

そして統治者となり戦乱を巻き起こす悪を滅ぼせば、国は繁栄し、より善い世の中になるだろうと。

その時の彼女は簡単にそうなるだろうと、勝ち続けているが故に、あまり悩まずに事実を受け入れた。

彼女は父の命を受けてその領地の統治者となる。

それが彼女にとって悲運の始まりだった事は、この時の彼女が知ることはないし、予想できる事でもなかった。

これが初代神座の戦女神、理をはじめて作り、ものがたりはじめて座に至り、はじめて神となるモノの始まりとも呼べる人生が始まったのである。

## 初代神座の戦女神 - 中篇（後書き）

理の無い世界ってこんな感じになると思うんだ。多分。  
いやもつと色々アレなのを書きたいんですよ、ええ。

初代と主人公の絡みがすげえ難しい。

黄昏や水銀と主人公の絡みかきてー、サタナイルちゃんとキャツキ  
ヤウフフはないけどね。

構想とプロットは大体出来てるのにそれを読める文章として起こす  
のが難しい。

文章とも言えない文字の羅列しか打てない自分が悲しい。

## 初代神座の戦女神 - 後編 (前書き)

パラロスで使われていた設定が好きな人は、TOAした時、ホドやマルクト、ダアト、ケセドニア、ビナー平原等アレの設定が使われていてにやにやしたと思われます。

ローレライは座の主としてさほど強そうには見えないね。まともだから。

## 初代神座の戦女神 - 後編

彼、ファルシータが鏡の前にぼーっと突っ立っている。いや、震えながら許しを乞う様に立っていた。  
白の空間のとある場所で鏡の中にそっと問いかける。

「<sup>わたし</sup>僕は何処に居るの」

触覚を通し、かつての自分を見たような錯覚を永遠の勝者を見た時  
感じ、彼の精神はぐるぐる廻る。

強大な力を持つ自分、しかしその力を自由に使うことは出来ない。  
好き勝手に宇宙を創り自由に見えるだろう。だが自由等無いのだ。  
この”無色？に囚われた今の己には。

中途半端に力を使えば全てが終わる。文字通り全て。今まで自分が  
してきた事が水の泡になる。

また同じ事を繰り返す羽目になる・・・それは許されない。いや、  
そんな自分を許容できない。

己が不幸を嘆く事も、不条理を恨んだ事も、人、神を呪う事も、最  
早遠い過去。

彼女に接触すれば自分は変わるのだろうか？そう思いながらも、そ  
の一步が踏み出せない。



「わたしは何？自分って何？個性？わからない・・・ワカラナイ・・・」

そう、あの”病室？以前の記憶がほとんど無いのだ。自分がどこから生まれ、どこから来たのか不明なのである。

そもそも自分は本当に”人間？だったのか？断片的な記憶はおぞましいモノばかり。継接ぎだらけの記憶と心。

何も知らなかったあの頃、足りないものを補えば解決すると思い込んでいたままの自分であればこのようにならなかった。

（私は誰？）

合わせ鏡に偽りの自分の姿を映し、問いかける。

無限に続く螺旋の虚像。嘘で塗り固められた己。

やがてくる未来に、素直な自分をさらけだせば或いは・・・優しい光《黄昏》を信じればいいのだろうか。

（つらい、さみしい、ひとりにしないで・・・だれかたすけて・・・）

そのすぐ近くで優しい機械が悲しげに見つめている視線に彼は気付く事無く。  
浮かんでは消える記憶のように、彼の、その渴望は白に掻き消された。

初代神座の戦女神 - 後編

統治者になった彼女、その悲劇<sup>ものがたり</sup>ははじまったばかりだ。

善かれと思い父から継いだ王位、天使を使い各国が覇権を競う戦乱の中に彼女は巻き込まれている最中であつた。

「左舷に3号4号、右舷に5号6号の天使を向かわせろ！中央はわたしが出る！」

統治者を受け継ぎ、そしてそれが各国に知れ渡り、幼いガキが統治者などと笑わせると言うが如く、一度は停滞していた各国の侵攻が再び襲い掛かる。

それに黙っている彼女ではない。自国の民を守らねば。侵攻してくる悪どもを駆逐せねば、と。

「ヴィクトリア様、装備の最終点検の方終わりました。いつでも出撃可能です」

配下の者に天使の羽のような、背中に装備する飛行ユニットと大きな機械の銃剣を渡される。

「わかった、貴官には通信の方を任せる。わたしは前線に出る」

「了解いたしました。ご武運を」

そして彼女は空を駆ける。そしてついには無数の天使群を見つける。これがそのまま領内に入り、爆撃などされた日には目も当てられない惨状になるだろう。

「我が国に仇名す悪どもよ、我が剣の錆となり我が国の礎となれ！」

有象無象のように空に浮かぶ天使に、そう声にあげて突撃する。

彼女のように飛行ユニット等天使の装備を使い戦う業を機人術という。

天使のように馬鹿みたいな火力の装備、そして自由に空を駆ける事のできる、人であって最早人ではない域に達している武術の一つ。これを使うには天から与えられた才能が左右する。誰しもができるわけではない。

現状”彼女”以上に天使装備を使いこなせる人間等居ない。いや、居るかも知れないが彼女のように戦闘に参加してその力を振るう事はまずないだろう。

空を駆けて無機質な天使達を彼女は駆逐する。まるで赤子を捻るが如く蹂躪していく。切捨て、銃や砲撃等を使い破壊していく。何故彼女が生身の身体で天使達を圧倒できるのか？それは天使達に柔軟性というものが無いからだ。でたらめな火力を誇っていたとしても思考能力が無い。

だがそれは”彼女？だからこそできる事であって、他の人間ができる事ではなかった。

少し考えてみればわかる。同じような武力を持っていて、そこに思考能力の有無だけでここまで圧倒できるか？

答えは否である。

他の人間が真似をしようものならものの数分で落とされているだろう。

そして天使どもに勝ち続ける彼女、その姿をみて彼女の配下達は「流石はヴィクトリア様、いや、勝利の女神様だ！！」とただただ尊敬の眼差しで彼女を見ているだけである。

誰も彼女を労わる気持ちなど持ち合わせていない。彼女は使える。彼女さえ居ればこの国は安泰だ。そんな事しか彼らの思考には無かった。

「わたしは・・・」

自分のしている事が本当に善い事なのかわからなくなっていった。  
天使どもを駆逐し、自分のように機械を装備し、空を飛ぶ”人間”  
も駆逐した。

そしてその初めて人を切った感触が忘れられない。

いや、時間をおいて、戦闘が終わった後その感触に恐怖した。

自分はこんな事を望んでいない。何故どうしてこうなったのかと。

「あ・・・ああ・・・」

自分が身に置いた戦場というものが、ここまでのものとは思わなかった。

天使達を駆逐するだけで済むとおもっていた。だが実際は自分と同じように機人術を使う人間とも戦った。

まさか自分以外にこんな馬鹿げた事をする者達がこの戦場に居とは思わなかった。

機人術を使う人間の数は少ない。例えるなら宝くじで4等か3等が当たるくらいの割合だ。

そしてソレを斬った後にそれが機人術を使っている人間だということに気が付いた。

感触が違ったのだ。

あの肉を断つときの感触、骨に当たった時のあの感触が。

天使達と違うのだ。

人を斬るというのはこういうことなのか、と。彼女は悲痛な表情を浮かべる。

だがその感情を自分は悪を駆逐した善である。善い事をしたという感情で押さえ込む。

でなければやっていけないからだ。気を抜けば、自分があぁなってしまう。自分はまだ死にたくない。

まだこの戦争は終わっていない。こんなところで自分が潰れれば自国の民がああなってしまう。

そして自分が守った配下の者達を見る。

なんだその目付きは……。その視線はなんだ……。？

他人の視線が恐ろしい。何を自分に期待しているのだろう。何を思っているのだろう。

わからない。何だその視線は。

初めて人を斬った後だった事も要因があるのだろう。

彼女は他人を初めて恐れた。

勝ち続けた彼女の初めての感情。

ぐるぐるまわる感情を、ソレを押さえ込むのに必死にあがく。



「・・・？」

彼女はそんな心境の中、灰色の少女を幻視する。

アレはなんだ・・・？

自分に近い存在のような気がする。

最初は驚いたような表情、そしてそれから悲しそうな表情で自分を見ていた。だが気付いたときにはその少女は居なかった。

もし敵だったのなら自分はやられていたかもしれない。けれども、この辺りにはもう敵等いない。全て駆逐した後だ。

では味方か？否、味方の配下の者にあんな者は居なかった。

こんな場所にただの民衆が住んでると言うことは無い。

おそらく自分が見た幻だろう。自分の罪悪感が作り出した幻。でなければ幽霊のようにぱっと消える等ありえない。  
そう結論付けた。

「はぁ・・・幻覚まで見えるくらい疲れてるのかな・・・わたし」

これからわたしはどこにむかうのだろう・・・。

誰か助けてはくれないのだろうか。もし、神様が居るのだとしたら、どうか聞き届けて欲しい。

争いを無くしてください・・・と。平和な世にしてくださいと。

そうして戦闘が終わって、数時間ほどぼーっと立っただけに見える彼女を配下が回収するまでその行為は続いた。

初代神座の戦女神 - 後編 (後書き)

いつだって何かを変える者は、群れからの突然変異、変わり者。

## 幕間・トリックスターの芽（前書き）

DDCの楚良っていいよね。ああいう主人公が好きだ。  
DDCの二次創作なんて見たこと無いけどな！！まあ・・・

ソラニカの菊哉もいいよね、主人公じゃないけど。

## 幕間・トリックスターの芽

彼、ファルシートは一人白の空間で考えていた。

アレを神座まで至らせるにしても、アレが孤独なままだと何れ自滅してしまうだろうと。

故に、何か介入をおこなわなければならない。

「だけど私が直接関わったって上手くいくわけがない」

おそらく自分の事を神様だと勘違いして、彼女は助けを求めてくるだろう。そういう未来が見えてしまうのは容易い事だった。

だがそれでは駄目だ。自分にしてやれる事など何も無い。そして彼女も自分に出来ることなど何も無い。

ならば間接的に関わるしかないのだ。自分で行えないならば、他者を使って”自分にとってあるべき未来？へと繋げる。

「この際、別の宇宙から適材だと思われる人材でも作ってひっぱってこようかな」

確か昔、自身が創った宇宙の一つ、ナズナが管理する宇宙。プグラシュティクとエウロパ人が存在する宇宙に人間のvariety種が居たという報告を昔ナズナから受けてたなど、彼は思い出す。

「あそこの過去に介入して、誘導してつてなるとちよつとめんどくさいなあ・・・」

地球に類人猿を祖とする地上を支配する人類と齧齒類ヒューマンを祖とする地下を支配する人類プグラシュティクとの間で生存競争が行われている宇宙である。今は確か木星に存在するエウロパ人が仲介役として間を持っているようだが、またいつ戦争が起こるかかわからない緊張状態だったはずだ。

彼らは昔、時間を自由に行き来できる科学力をもっていたはず。発展性としては優秀だが、誘導するとなるとかなりめんどくさい。

過去に何度かナズナによって彼らはその科学力を失わされたはずなのだが、それでも侮れない科学力を持っている。それは何故か、それは生存競争において互いに互いの祖を滅ぼす為に、過去に移動して相手の祖を狩る、そうさせないために祖を守る。等というような戦いを続けていた宇宙だからだ。

ナズナの”調節？”によって今ではもう行われていない戦争だが、あの意味一つの宇宙の結末まで辿り着きそうになった世界である。

「まあ、なんとかなるでしょ。ナズナー？カモーン」

そう彼が言葉を発し、彼のすぐ横に黒い楕円形のような影が出て、その中から機械が現れる。

「呼びましたかマスター！呼びましたよね！結婚式ですか！！？やっつとですか、待ちくたびれました」

なにやらアームをぶんぶん振り回し、いやんいやんとのたまう機械。

「どうやらこの機械、メンテナンスを怠っていたようだ。はやく分解しないと・・・」

そう俯きながらボールのようなものを何も無いところから取り出す彼女の創造主。

「ちょ・・・マスター！考えてる事が声に出てます！怖いです！ちょつとしたジョークじゃないですか！おおめに見てくださいいよお・・・」

彼は苦笑いしながら自分もジョークだよと涙目の機械に伝える。そして「うう・・・」。と拗ねている機械の彼女に表情を引き締め、伝える。

「ナズナ、君が管理している世界に行きたい。連れて行ってくれ」

「・・・わかりました。お送りします」

楕円形の黒に包まれて二つの影が消えていく。

この瞬間、後に観測者と呼ばれ様々な世界で物語を引っかき回す変り種の青年と、無色に囚われた子供との邂逅が確定した。



若芽と無色の邂逅

彼の、青年の生は、常に退屈そうであった。とどのつまり驚いたりした事が無い。

普通は驚くであろう事でも、ああ、これはこういうものだった気がするな。

普通は喜ぶであろう事でも、ああ、前にも似たような事があったな。普通は恐怖するであろう事でも、ああ、昔こんな体験をしたような気がする。

等と、まるで”既知感？”のようなモノを感じる人種であった。

だから、両親に褒められても本心から喜んだことは無かったし。航空機の事故で家族を失っても、そんなものだとしか感じなかったし。

今まさに、絶体絶命の危機のような状態であろうとも、彼は恐れたり、驚いたりしないのである。いわば感情の突起が酷く薄いのだ。

何故このような青年が生まれてしまったのか？それはこの世界のあり方にもある。ナズナにより調節という名の管理、それは擬似的な永劫回帰のような理になっていた。

ヒューマンとプラグラシユティクとの間で生存競争が激化し、有機生命体の存続に危機が訪れれば、時間を遡り、その要因を戦闘実行体を送り排除する。

また、時空間移動できる機械が発明されればまた時間を遡り、その

要因を戦闘実行体を送り排除する。

そしてその結果を無かった事にし、平和な結果に導く。このような事を過去に何度も行つたのだ。

全てはマスターの為、健気な機械の愛のせいであつた。

故に、既知感を持つ者が産まれたとしても、別段”不思議”な事ではない。

そんな突然変異のような青年、実は今絶体絶命のピンチに陥っている。

「こいつはどうにも・・・分が悪いね・・・」

プグラシュティクの集団に片腕を切り落とされ、立っているのがやつとのような状態。

切られるまでに10体ほどのプグラシュティクを彼は生身で倒していた。

「しかし、どいつもこいつも新鮮さが無い、まるで昔してきたか  
のようだよ」

満身創痍、しかし彼はどこか余裕じみていた。いや、達観している。

「ここが俺の終焉かね、今度があるなら新鮮な生を送りたいもんだ」

そして諦めてしまっている。そもそも死にながら生きていたような  
ものだった。

だが運命というものがあるのなら、その運命は本来の道筋とは異なる  
道に行くことになる。

青年とプラグシュティク数体が睨みあっているすぐ横に黒い楕円形  
のようなモノが現れる。  
そこからポトンと小さい灰色の髪をした少女が出てきたのだ。

「あたた・・・（この時代でよかったのかな・・・？）」

「おいおいなんだよこりゃ・・・！」

青年は初めて驚いた。彼にとってとても新鮮だったのだ。

初めて見る現象に、初めて感じる感情、彼はまさに今生き返った。

彼と同じようにプグラシュティクも驚きと困惑、動揺が隠せない。

「おっ？（金髪の・・・どうやら間違いないみたい）」

そうついつつ腰に付いた砂利を振り払う少女。

「・・・お嬢ちゃん、ここは”危ない？ぞ？・・・”つかそもそも何モンだ」

彼は驚き戸惑いながら冷静さを保った様に繕い彼女に問いかける。  
黒い円形の影からポトッと落ちてくるなぞ、とてもじゃないが”普通？”じゃない。

「あははっ！おにーさん心配してくれてるの？やさしーんだね。何

モンか・・・（ポケモン・・・って答えたら怒るかな）君を新鮮な世界に連れて行きに来た？って所かな」

彼女は笑いながら言う。しかしその目は一度も笑ってはいない。

「疑問系かよ！しかし何を言って・・・」

彼がその次の言葉を告ぐことが出来なかった。何故なら・・・

「お嬢ちゃん危ねえ！」

残っていた数体のプグラシュティクが少女に一斉に襲い掛かったのだ。

しかし少女は慌てた様子も無く、ただうっとおしげにプグラシュティク達に振り向く。

「なんだこいつら、まだ居たの？私にとっては要らないから消していいよね、まあ誰に聞いている訳でもないけど・・・」

（

）「

そう何やら聞き取れない言語を少女が言った瞬間、文字通り数体の  
プログラシユティクが少女に吸い込まれるように”消えた？のだ。

「おいおい、勘弁してくれよ。何の冗談だ」

青年はそう言いつつも表情は喜びに満ちていた。感じた事の無い感  
情。新鮮な体験。

自身がやつのことで10体近く倒せた敵を、見たところ少女にし  
か見えないモノが一瞬で消し去った事実。

どれもこれもぶつとびすぎて面白いと、彼の中で疑問よりも喜びの  
感情が占めていた。

「こんな”些細？な事で一々驚いてたらこれからきりがなくなると  
思っよ？おにーさん」

「ハッ！これが些細な事なのかよ！面白れえ・・・お嬢ちゃん、俺  
をどうしたいってんだ」

これ以上の事が起こるのかと期待を膨らませる青年。

「まあ、とりあえずついてきて。その腕なおしてあげる。話はそれから」

「おー、そーいや腕切られたんだっただわ、んじゃ頼むわ」

そう言い、少女の後を付いていく。とても新鮮な感覚、感情が青年の胸を占めながら。

そして数十分くらい歩いた頃だろうか、突然少女が立ち止まり「ここらでいつか」。と言った瞬間”何も無い空間から白い建物を取り出して置いた？のだ。

「お嬢ちゃんにかかれば何でもありかよ・・・」

「中入って、腕なおすから」



「オーケーオーケー。毒を食らわばなんとやらだ」

残った腕で手を上げながら建物の中に入っていく青年。そして青年に続いて少女が入る。

「んー、あつたあつた」

そう言い、またも何も無い空間から少女が取り出したのは、どう見ても人間の腕には見えない異形の腕であった。

「これをおにーさんの魂と直結させます。そしたらパワーアップして完全復活いえーい」

なにやら少女が青年に向けて片手で異形の腕を持ち、片手でピースしながら近寄る。

一般論から言うところごく不気味でシュールな光景だ。

「いえーいーじゃねえよ。俺人間やめたいなんて言っただけぞ」

「別に見た目は人間のままに出来るから安心していいよ。化け物になりたければなれるけど」

「ああ、それと私おにーさんをお願いもあるの、だから腕をなおす報酬としてお願い聞いてくれると嬉しいな」

さっきまでの態度とは打って変わって真剣な眼差しで青年を見る少女。

「おうおう、人間のままならそれでいいわ、んで願いとやらはよくわからねえけど、命の恩人でもあるし？内容によっちゃ聞いてやるよ」

そう青年は苦笑いしつつ、少女に答える。

そもそもなんでもできそうな少女の自分へのお願いとはなんだ？青年は自分の好奇心に逆らえない。

「ああ、そんなに難しい事じゃないよ？一人の女の子を救って欲しいの」

「お嬢ちゃんをか？言っちゃなんだが俺がお嬢ちゃんに出来ることなんてほとんどなさそうだぜ」

「違う違う。私じゃない。まあ腕なおしてそれから連れて行く世界に居る少女なんだけどね、詳しいことはなおしてから話すよ」

苦笑しつつ少女は否定し、青年に近づく。

そして少女は青年の中に異形の腕を入れる。文字通り。だがしかし青年が苦痛に苦しむとかそういう現象は一切起きなかった。

そしてすぐ青年の身体に異変が起こる。

「おいおいマジかよ、腕がいつの間にか元に戻ってやがる」

青年は驚きを隠せない。笑いながら自分の身体を確かめる。どこか異変が起こるか、後遺症みたいなモノが残るかと思っていたが普段よりも調子がいいとはどういうことなのだろう。

この世界の医療技術でもここまで完璧に復元する事は困難だ。

「うまく同調したみたいだねー、よかったよかった」

「お嬢ちゃん、一体何をどうしたらこうなるんだ」

笑いながら青年は少女に問う。

痛みも何も感じずに、一瞬の内に無くなった腕をなおしたのだ。  
この不思議な現象に青年の好奇心がうずく。

「今のおにーさんに言っても多分半分も理解できないと思うよ？それでもいいなら1から10まで説明するけど」

「いや、長くなりそうだからいいわ。パワーアップって言うたが、何がどうパワーアップなんだ」

「そうだね、簡単に言うと人間が至れるであろう最高峰の筋力とかスピードとか体力をおにーさんは手に入れた」

少女はめんどくさそうに青年に説明しはじめる。

「あとは侵食っていう力がもしかしたら使えるようになるかもしれない」

「侵食？」

「世界そのものを浸食する力って感じかな。まあ使えるかどうかはおにーさんの才能次第」

少女はなんでもないかのように言い捨てる。

そして青年は一通り聞いて満足したかのように少女に問う。

「才能ね、まあ使えるようにその内なるだろ。んで？お嬢ちゃんのお願いとやら詳しく教えてくれや」

「ちょっと長いかもしれないけど聞いてね、とある不幸な一人の女の子の話んだけど・・・」

少女はヴィクトリア、永遠の勝者たる者の話を青年に聞かせる。そして彼女を側で支えてやって欲しいと。願いを彼に言う。

自分では支えになる事が出来ない。似すぎている自分にはどうにもできないと。

だから彼女を救えるような人間を探していたと。

了承してくれるなら彼女の居る宇宙に送ると。少女はそう言った。

「信じられねーような話だが、お嬢ちゃんが現に信じられねー存在だしな、信じてやる」

「まあ、人間からしたら出鱈目だろうね、それは自覚してる」

少女はどうということもないとでも言うように肩を竦めながら青年に答える。

「まあなんだ？こんなつまんねー世界から移動させてくれるってんだろ？引き受けてやるよ、そんで女の一人くらい救ってやるよ」

豪快に笑いながら青年は少女の願いを聞き入れた。少女は悲しげな表情で「ありがとね」と呟く。

「そっぴや今更だけどよお嬢ちゃんの名前なんてんだ？俺の名前はファンダー・ストライフってんだ」

そう言いつつ笑顔で青年は少女に向けて手を、握手を求めるように出した。

少女は一瞬呆けたような顔をした後、苦笑しつつそれに答える。

「ああ、名前ね・・・ファルシート、ファルって呼べばいい」

「んじゃファルちゃん、その不幸なお姫様とやら救いに行きますか  
！」

「うん、それじゃあ行こう。」 ストライフ？のおにーさん」

そして少女と青年は楢円の黒い影に入り、この世界から姿を消した。

こうして後に観察者と呼ばれる彼が、あの世界へと誕生《移住》したのである。



## 幕間・トリックスターの芽（後書き）

会話多少多目にしてみましたけどうなんでしょうね。  
こっちのほうが見やすいんですかね？

うん、ここまでの展開までは思いつきで書けたんだ。  
問題はここからだ。

始点が終わる所まではとりあえず書き直してる最中。

二代目も入れるかどうか迷ってる。

はあまじ初代のおねーちゃんはある

## 灰色のキャンバス（前書き）

グラハムハンコック氏の書くトンデモ考古学っていいですね。引用多いですけど。

正田卿の神座の三部作も多分そういうのを表現したかったんだろうかと自分はふと考える訳ですよええ。

関係ないですけど、世のノベルゲーム、大鳥大尉のようなヒロインばかりだったらいいのにな、そうだったらいいのになって思う今日この頃。

## 灰色のキャンパス

灰色は夢を見る。

ちっばけな病室。それが子供に許された居場所だった。一面の白、そして並ぶ無機質な機械。

もしも、この両足が自由だったならば、部屋を出て外を見ることがもできただろう。

もしも、この両腕が自由だったならば、自由に何かに触れる事も出来ただろう。

だがそんな自由は無かった。にしか過ぎなかった自分には何一つ自分で決めることを許されてはいなかった。

苦しい、痛い、やめて、誰か助けて。

そして子供は今日も教育という名の実験を受ける。

「イギいいいいい・・・アアアアアああああa a・・・痛い痛いイタイイタイイタイ・・・」

「ふむ、このタイプの麻酔にももう耐性が出来たのか、適応速度が上がっていると見える」

痛い痛いと言っく子供をよそに冷静に分析機のようなモノを見続ける防護服のような装備をした人間達の声が響く。

彼らはこの行為に罪悪感など覚えない。ただの研究対象に対する実験だからだ。泣き叫ぼうがそれは値として記録されていくだけ。

皮を裂かれ、内臓まるだしにされて様々な薬剤を投与される子供。

「主任、対象の反応が無くなりましたが、電流流して続行しますか」

「む？バイタルサインを見る限り意識はあるようだが、声でも枯れたんじゃないかコレは、電流はいらん・・・SC00のストレステストは続行だ」

痛みに慣れて声を出さなくなったら、子供を無理やり覚醒させようとする研究者達、労わりなど無い。

安息など存在しない。この子にとっての日常とはコレなのだから。

（これが人間・・・これが学んでいたモノ・・・これが・・・）

（苦しい・・・けど死にたくない・・・生きたい・・・助けて・・・）

薄れゆく意識の中子供が願ったのはただただ純粹に誰かの助けだけだった。

この地獄から誰か救い出してくれ。もう耐えられない。

そして意識を失いまた、起こされては実験、そして意識を失う。これの繰り返しだ。

煩わしい。

汚らわしい。

気持ち悪い。

人間は不可解だ。

子供は憎悪しながら何かに助けを求める、そして世界は暗転する。

「……う、……あ……」

覚醒し、辺りを見渡す。そこには何も存在しない無色しか存在しなかった。

ああ……夢か……と。灰色の子供は独りごちる。

「……懐かしいモノを思い出した。……おぞましくて、嫌な……嫌な……？何故……」

苦虫を潰したような表情で子供は涙を流しながら呆然とする。

このような記憶、自分は”持っていた？か？

否、このような記憶”持ち合わせていない？。

何かが作用して、自分の記憶の欠片が急に甦<sup>バーッ</sup>ったりしたのか。  
その何かとは？そもそも本当に無かったのか。ただ単に忘れていた  
だけではないのか。  
考えようとしても、何かノイズや靄がかかったかのようにその部分  
だけは明確な考えができない。

「いや・・・、私はあの病室で終わり、あそこで始まったんだ・・・  
それでいい・・・」

そう呟き自分を誤魔化す。そう、自分の過去についての記憶が”病  
室以降？からしか無いのだ  
それが何故なのかなんてわからないし、思い出したくも無い。

辛かった、苦しかった、その事だけはわかっている。所詮は過去、  
どうでもいいことなのだ。  
そして子供は透明な虚構で欠けた部分を補う。

この色の付いていない愚かな楽園で。ただ独り。灰色の子供はただ  
ただ佇み続ける。

この宇宙の未来という天秤には、二つの結末が用意されている。  
どちらに傾いているかは誰も知らないし、知るすべもない。

結末は人々にとって常に不透明で、どれだけ過程を変えようと、どちらか一つの結末へと傾く。

結果よりも過程が大切だ。なんて言葉は愚者の戯言にしかない。



だが、そこに不純物が紛れ込んだらどうなるのだろうか？

もしも、結末がわかる者が居たら？

もしも、その結果を変える時間がある者に教えたのだとしたら？

もしも、結果を変えられる力を持つ者がその結果を知ったとしたら？

その者はどうするのだろうか？その結末が自分にとって不都合なものならば、結末を必死に変えようとするだろうか。

「まあ・・・遠くを見すぎて近くが疎かになったら、本末転倒だね・・・」

彼、ファルシータはそう言いつつ遙か未来を幻視するのを止める。触覚を通じて、奇術師の若芽があ宇宙に送り込まれたのを確認する。

自ら動く事が出来ない無力な自分。己が使える力に耐え得る宇宙が成長するまでは何も出来ない自分。

「もうすぐだ、もうすぐはじまる・・・もう少しなんだ・・・」

そう呟く彼の表情にもはや感情は無い。擦り切れてしまっている。  
遙か遠い未来のもしもの天秤。いくつもの理の果て、その天秤の均  
衡はまだ変わらぬまま。

灰色のキャンパス

「なあファルちゃん、ここほんとに別の星なのかよ」

荒れ果てた荒野に佇む金髪の青年が灰色の少女に問いをかける。

「そうだよ、ここには獣人もいなければ、木星人なんて素敵な人種も居ない宇宙だよ」

「それにしちゃあ、あんまり元居た世界とかわらねーんだが、いやむしろこっちの戦場の方が悲惨だがな」

荒野に無数に散らばる肉片と金属片、機械の残骸、人だったモノ、元が何だったのかわからなくなるほど細かく切り裂かれた肉。そしてこの異常な腐臭である。まるで腐った後すぐのような新鮮な腐臭。焼け野原と現すのすら優しい表現になるであろう大地。

「あー・・・、科学技術はさほど変わらないと思うけど、武器や兵器はこちらの方が発展速度が速いね」

「それにこの人型の兵器？の残骸がなんともいえんわ、なあファルちゃん？こんな地獄のような世界に生きてるってのかよそのお姫さん」

呆れたような表情で答える灰色の少女に対して、口の中で苦虫を潰してしまっただような表情で問いをかける金髪の青年。

「ふむ、地獄ね、言い得て妙だ。確かにこの世界は彼女にとっては地獄そのものだろうね。  
そしてその地獄の真ん中に飛び込んでいくしかないのが彼女の現状なんだよ」

悲しげな表情で、青年の問いかけにそう答える灰色の少女。

「ほら、あそこ。屍に埋もれてるようで見にくいだろうけど、あそこよく見て」

「ん？あリゃあ・・・」

少女が指摘する遠く離れた場所、ぎりぎり視界に映るか映らないかの所に例のお姫様が佇んでいた。

「あの娘だよ、ぼーっと佇んで放心してるみたいにしてる」

「ああ・・・、あの子か」

二人揃って遠くで放心しているお姫様を、難しい顔をしながら見つめる。

「おそらく、このままだと近い将来彼女は潰れて自滅する。そこで君の出番」

「なるほどな、最悪な三文芝居のなかに俺達が入ってハッピーエンドにしようって訳だ、笑っちまうくらい単純明快だねえ」

肩をすくめながら言う青年に少女は待ったをかけるように言葉をかける。

「いや、私は芝居の中には入らないし入れないよ」

「ん？なんでだよファルちゃん。俺にだけやらせようっていうのかよ」

言葉をかけた少女を胡散臭そうに見つめながら青年は問いかける。

「私は他にもやる事があるの、直接助けるのはストライフのおにーさんの役目、私は脇役、間接的にしか出来ない」

「よくわかんねーけど、お姫さん助けるのは俺にほっぽりだすって訳かよ」

「悪いと思うけど、直接じゃ出来ない事もあるから・・・」

悲しげに笑う少女に青年は、これ以上何を言っても少女は意見を変えないだろうと結論付けた。

「はあ・・・わーったよ、細かい事は聞かないでおいてやる。俺に任せとけや、女の一人や二人独りで助けてやる。ファルちゃんはファルちゃんの出来ることをやってきな」

そう言い少女の頭に手を乗せて撫でる青年。

「うん、任せる」

「おう、任された」

青年は少女の言葉に胸を張って応える。  
そして少女はなにやら何も無い所をこそごと手で何かを探してる  
ような仕草をして、二つの拳銃を取り出した。

「これ、餞別。何かと物騒な世界だから」

「ん、ありがたくもらっとくわ」



「それじゃあ、やる事が終わったら合流って事で。気をつけてね」

少女は背中から白と黒の羽のようなモノを出し地面から浮く。

「そっちのやる事が終わってる頃にはお姫さん助かってる後かもな、ファルちゃんも気をつけてな」

「じゃあね」

そして少女は空を駆けていく、遠く遠くに飛んでいく。その速度は速く、あっという間に見えなくなってしまう。

「さあて、お姫さんをちゃちゃっと救ってこようかね」

少女が肉眼で見えなくなってから、そう呟き青年は歩き出す。

遙か上空、大気圏外で灰色の少女は止まって震えていた。  
否、笑いを押し殺すように自らの身体を抱きしめて震えていた。

「くっ・・・くっく、人間ってこういうモノでもあるんだっ たね、  
忘れていたよ」

少女は感慨深そうに、愉しげに先ほどまでの場面を回想する。  
思い通りとは言わないが、自分が望む方向に事象が流れていく。

少女は青年やお姫様を笑っているわけではない。

今までの自分の苦勞とは何だったのかと、自分のこれまでの行いに  
笑えてしまうのである。

「ああ・・・、これから喜劇が始まる。主人公は金髪の変り種の  
青年、ヒロインは喜劇にふさわしい力を持つ普通の女、  
神座を巡る戦いがこれからはじまる・・・くすくす・・・」

灰色の少女は上空で踊るように愉しそうにくるくる回る。

「君が主人公の人生はこれが最初で最後だろうから、せいぜい楽し  
んで来るといい、”ストライフ？のおにーさん・・・くすくす・・・」

「

少女の言葉は誰にも届かない、そして届かない言葉と共に少女はま  
るでそこに誰も居なかったかのように存在掻き消えた。

## 灰色のキャンバス（後書き）

最近なんか打つ手が止まる。まあ繋ぎって事で。  
こついうときは星座神話とか読んだり、セインツロウ2でもやるし  
かない。

この駄文読んで、自分のほうが面白く書けるぜ！っていう人が書いてくれる事象が起こる発破となればなって思う今日この頃です。

## 道化と勝利と灰色と（前書き）

人間が世界を把握するために用いる基本的カテゴリーの対立を仲介し、

世界についての統一的认识を与えるもの  
それがトリックスターらしいです。レビ・ストロース先生曰く。

## 道化と勝利と灰色と

「なあ……お嬢ちゃん……アンタが何で”ここ？”に居るんだよ!？」

金髪の道化が灰色の子供に問いをかける。

問いかけながら、銃で威嚇射撃を行う。

この場所は、神座が作られている研究施設。  
各国が求めて、争い続ける渦の中心である。

「何でつて……その子が”神？”に至るために協力してあげてただけじゃない。何で怒ってるのかな？」

「わたしが……？」

そう、君がやるのだよ。

何故なら、嘆いていたじゃないか。この世界を、他人任せな理を。  
努力するという事すら無く、他者に力を求めて利用する、この世界を。

ああ実に哀れだよ。故に、不肖ながら自分が協力しようと思ってね？  
そこに居る彼と共に君を、この世界の”神？”にしてあげようと思っ  
たのさ。

このどうしようも無い世界を変える為に、君を救うためにね。

そうすれば

「そうすれば……」

皆が君に対して、救いを求め、利用するような世界では無くなり、

君は救われるかもしれない。

不安定で不確かな世界を、君が求める理想<sup>シャンバラ</sup>に変えれば……

「だが、わたしは……」

私が君に課す代償は、君が人間から神になる、ただそれ一点のみ。

「何故わたしなの……」

君しかねるものが、この世界に生まれてこなかったからだよ。

今更拒むのかね？その選択肢でよろしいか？

いいかな、この宇宙<sup>そら</sup>という名の天秤が、良い方向にも悪い方向にも傾く非常に不安定な状態だ。

君がならなければ、この世界は何れ無秩序なモノになり崩壊する。

時間が無いのだよ。もうこの世界に残された時間は。

誰にも管理されていない世界というのは、自然と自壊していくものなのだよ。

君には見えるだろう？聞こえるだろう？世界の叫び声が、苦痛に歪む断末魔が。

誰かが神になって助けなければ、この世界は死んでしまっだろうなあ。

何のために君は立ち上がった？この国を、世界を守りたいのだろう？善い事をしたいのだろう？

そのために、それだけを自身の支えとしてこれまで頑張ってきたのだろう？

「あつ……ああ……」

悪は滅ぼさなければならぬ。善を行う自分は正義だ。自分の大切なモノを守りたい、故に敵対するものは悪だ。

世には正義と悪がある。我が滅ぼしてよい邪悪がある。

人は二種のみ。でなくばこの戦乱を許容できるはずも無い。

そうであろう？善悪二元論に至った少女よ。

そう話続ける灰色の子供に、怯えだす永遠の勝者、ヴィクトリア。

「姫さん落ち着け！……救うんじゃないのかよ！何でアンタが争いの元の”神座”をこいつらと一緒に作ってるんだよ！！」

金髪の道化が怒っているのには訳があった。

共に勝利の女神を救おうと、そう約束した相手。

頼んできた相手が何故敵側？のような立ち位置に居るのか。

「救うためだよ？神にならなければ救われない、君も私も……誰も彼も……ね！」

「そうかよっ！」

ストライフは銃を撃ち続けるが、当たった弾丸は全て子供が吸収しているように見えた。

傷跡も見当たらない。

「わたしは、民を守る！皆を助ける。皆が救いを求めるなら応えよう。私は善なのだから。だが貴様は打ち滅ぼして良い邪悪だ！！」

「ならばやってみろ。魅せてくれ、私に絶対なる正義のみわざを。」



何を求め何を願い、何を犠牲にして何を成すのか」

「わたしは、皆のために……貴様を滅ぼす……！神だろぅがなんだろぅがなつてやる！宣戦布告だ！受け取れ……！」

そう言いながらヴィクトリアも、灰色の子供に攻撃をし始める。

「ふふ、ふふふふ……」

結構。それでいい。疲れるのだよ。道化を続けるのは。

ああ、君はとても似ている。かつて、病室で独り恨み辛みを嘆いて救いを求めていた自分に。

君は、今誰よりも美しいよ。

心底うんざりしている。

歪な合わせ鏡のようで、見ている自分自身が辛いと思うよ、心の底から。

「ヴィクトリア！ファルちゃん……」

「誇れ、君が世界を救うのだ。故に、私が全てを懸けて約束しよう。今この時における君の選択　たとえ誰にも間違っているとは言わせない」

ヴィクトリアに貫かれ、身体から血が溢れ出す灰色の子供。

だがしかし、それは本当に血と呼んでいいものなのだろうか？真っ黒である。

「ではこれより君がこの世界の”神”だ」

そう言つて満足げに雲散していく灰色の子供。  
もう、役目は終わったとも言つかのように。

「これで良かったのか……？」

困惑する金髪の道化。だがしかしその問いに答える声は無かった。  
ヴィクトリアはただただこれからの自分に対して、絶望を覚えるだけであつた。

「これで良かったのですか？マスター？」

とある無色の世界で、灰色の子供に問いかける機械。スネーカー。  
だが、それに応える声は無く、スネーカーがマスターと呼んだ子供は。

ただただ、眠り。泣き続けるだけであつた。

所変わつて神座が完成し、理が二元論となつた世界では。  
灰色の子供の残滓達が、とある建物に集結していた。

そう、あの”完璧？な建物である。

「我等が、世界を管理するのだ。神なぞ他人にやらせれば良い。そうであるう？皆の者」

誰も彼も、理から外れたならず者。  
他人を利用する事に特化した者達。

この者達が、後の世界に多大な影響を及ぼす。  
この者達が後にとんでもない化け物を作り出し、自分達はおろか、  
自分達の創造主を苦しめる未来がくるとは。  
誰が想像出来ようか。

この時の灰色も、灰色の子供達もまだ与り知らぬ事である。

## 道化と勝利と灰色と（後書き）

触覚死亡確認。

本体はただ泣き続けてるだけ。

## 道化と勝利と灰色と2

「わたしは……わたしは……」

雲散した灰色の子供。

それが合図とでも言うかのように、最早人間という存在から逸脱したかのように。

存在そのものが肥大化したヴィクトリア。

「ちくしょう……誰を恨めばいいって言うんだよ……」

そんな彼女を悲しげな表情で見つめるストライフ。

恨むべき対象をあつさり失ってしまい、その煮え滾る感情のぶつけどころが無い。

本来なら灰色の子供と、この永遠の勝者たるお姫様を救うはずだったのだが。

何故か灰色は、神座という争いの元ダネを作っている研究機関に居た。

争いの根源を潰そうと、ヴィクトリアと共に研究所を破壊する予定だったのだ。

酷く裏切られた気分だとストライフは独りごちる。

普通の生活に恋焦がれて、それでも尚争いを無くそうと躍起になって頑張った彼女がこれでは報われない。

そもそもあの灰色の子供は何者だったのだろうか。

まるで神の如く、力を振るい、何も無いところからモノを出す。不

可思議な存在であつた。

だがその少女も、呆気なくヴィクトリアに貫かれ雲散してしまった。  
あの子がどうなったのかは、己が知る術は無い。

「ヴィクトリア……」

「ああ…… ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああ」

少しはストライフと触れあい、マシになったヴィクトリアの追い詰められていた感情。

それはもう、ぎりぎりまで押さえつけられていたダムが決壊のよう

彼女が自身の、本来の渴望を叶えるというささやかな願いは消え失せ。

その感情の奔流に流されたかの如く、張り詰めた表情で自問自答するだけになる。

「未知は未知だけど……こんな未知なんて見たくなかったぜ……」

彼の呟きは、雲散した少女のように。ヴィクトリアの叫びと共に消えていった。

そして時は流れ、二元論の宇宙そらとなった世界。

彼女、ヴィクトリアは座に存在する。

世界は、悪と善の二種類の人間しか存在しない。

善は常に劣勢状態。何故なら”正義？とはそういうものだからだ。

善の人間達にとっては、生き辛い世界かもしれない。

悪の人間達にとっても、これはこれで生き辛い世界かもしれない。

普通の人間達には、もっとも生き辛い世界なのかもしれない。

何故なら二極化された世界だからである。

争いは常に起こり、平和とは程遠い世界。

戦争が日常茶飯事の宇宙。

そして日々進化していく機械達。

座についた彼女は、そんな世界を眺めながら。思いつめた表情で見守るだけ。

神になり、少し傲慢的に変わったのだが、根っこの部分は相変わらず生真面目な唯の少女なのだ。

彼、ストライフはそんな彼女を支えられないか、世界を支えられないか模索するが直接支える事は出来なかった。

何故なら己は、少しだけ力を持っているだけの。唯の人間だからだ。

「だけど俺は、あんたの作ったこの世界。嫌いじゃないぜヴィクトリア」

そう荒野の果てで、独り呟くストライフ。

生き辛いかもしれないが、退屈はしない。そう苦笑いしながらタバコを吸う。

「そうだな……こうなった責任は俺にもある。あんな胡散臭い子供を少しでも信じちまったのが運のつきなのかもしれない……」

少し顔を伏せて、悲しげに、だが少し口元は微笑んでいる。

「だが、あんたが居たお陰でヴィクトリアと出会えた。それだけは感謝してやるよ”お嬢ちゃん?”」

感謝と恨みが混ざり、複雑な表情をした後、どこか吹っ切れたような表情で晴れやかな空を見るストライフ。

彼の中に、もうファルシータへの恨みは無い。

だが、無いと言えば語弊はある。薄れたと言うのが正確だろうか。

「俺はそうだな、この彼女が作った世界の行く末でも見守る事にするぜ」

そう言う彼の表情は、しょうがないとも言つかのような笑顔であった。

紫煙をぼーっと眺め、火を消し。そして腕を天へと突き上げる。

その腕を空に掲げて、いつまでも見守ろうとも言つかのごとく。

だが、後に彼が神そのモノ。超常的存在を嫌う原因となるモノが産まれ出る事を。

自身が愛する彼女を、世界を壊す存在が出現する事を今の彼は知らない。



## 道化と勝利と灰色と2（後書き）

無駄な戦闘描写とか、無駄なモノやネタを省いた結果ちよつとおかしくなった気がする。

後、だーつと打ったモノを三人称に直そうとするとおかしくなりますね、はい。

始点は一応終わり？かな。

## 始点までの人物設定（前書き）

ここまで投稿できるとおもったら、出来ていなかった自身の不具合。

ネタバレにならない程度に設定小出し。

## 始点までの人物設定

・灰色の子供

主人公？のようなモノ。元となったのはフュシス。ヘラクレイトスなどの思想家達のアレ。

フュシス（自然）の意味は、神々も人間もその文化もすべてを含む存在者の全体（万物）のことをフュシスという。

様々な容姿になれる。本来の容姿は自身すら忘れている。

に囚われ、 になるが、自身が求めた結果には至らなかった。

本名SC00（ファルシータ）

実験動物のような扱いをかつて受けていた、シャヘルの因子を受け継ぐ新人類。

自身の力でどうかしようとするが全て失敗する。

仕方なく、自身を救う神を誕生させようと動き始める。

この子自身は戦闘に向いていない。しかし、勝てはしないが負けることがほぼ無いと言っていい。

本来は、ただただ泣き叫んで独りにしないでと助けを乞うだけの子供。

しかし、何かの因果で渴望が歪んでしまい、本来の願いとは違うモノになる。

故に彼は自身を救うべく、様々なモノを産み出し続ける。

座にはついておらず、産み出した宇宙の管理もしない。

になった時の精神も影響してなのか、純粋な子供が歪んだよう

な性格。

長年にわたり宇宙を産み出し続けた弊害なのか自身の、本来の渴望を忘れていた節がある。

自身が動くという事は出来ない。

そこらじゅうに触覚を飛ばして、自身が救われる日を永劫と言える時間を只管待つている。

触覚は自身の1/800万程度の質量。

仮にこの子自身が座につくと、とある方向性の覇道の素質を持つ者しか産まれてこない。

渴望がまったく同じな為に、例外的共存・共闘が可能。制限は無い。

座についておらずとも他者が存在する限り、魂の質量は無限に増殖・肥大化する。

それ故、座につくと永劫にこの子は救われる事は無い。

・能力

優勢因子を取り込んで自身の物にし、進化する。無機物、有機物を問わない。

・使う技？

生まれく抒情詩 宇宙の記憶 (Nascita poetica lirica Memoria dello spazio)

自身が内包する全てを放出して、宇宙を新たな世界に塗りつぶす。それは宇宙の原初であったり、記憶にある世界だったりする。ようは、ただ産んで古いのを押し潰すだけ。

存在を自身の中に戻す。ただそれだけ。

・スニーカー

灰色の子供が、自分の補助をさせるために己の中から出した存在。健気な機械。その実態は、出した灰色も全てを知っているわけではない。

その力は、かの永劫回帰の神と同等かもしれない。

あらゆる時間軸、宇宙に存在する事が出来る。

灰色が産み出した無数にある宇宙に存在する。

滅ぼすには、存在する宇宙全てを消すしか方法が無い。

彼はスニーカーを自身が作り出した機械だと認識しているが……？

・ヴィクトリア

元ネタは突然変異 ヴィクトリア女王から。

” Net zach ? に産まれながらに至っていた普通の人間。

灰色の自然発生した触覚のようなモノ。

力のほどは、ディエスイレで言うならばシュピーネさんクラス。機械の補助により流出世界へと至る。

・フアンダー・ストライフ

名前の通りそのまんまストライフの祖。

ピンチになっていた所を灰色の触覚に救われる。

埋め込まれて、自身の魂と同化した腕はもちろんアレ。  
その腕からあの娘が出てくるって流れにしようとしていたり。

・とある建物に残る者達

言わずもがな、あの年代記のようなモノを書く人たち。

初代座から最悪の座まで見守る、ある意味観察者で評論家な方々。

喋っていたのはもちろん、とある娘の父親ですよ。

恐らく、理なんて無い。わがままで他力本願な世界の住民が書いて  
いるんだろぅなぁという。

そっという発想から。

## 始点までの人物設定（後書き）

後に消すかもしれない。

関係ないけどFATE/ZERO CMパロ観たら。パラロスとデイエスとkkkのパロ動画作りたくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2981x/>

---

灰色が見る夢

2011年12月20日20時54分発行